

---

# 珍獸記

山下亞輝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

珍獸記

### 【Zコード】

Z0977D

### 【作者名】

山下亞輝

### 【あらすじ】

永きに渡り繰り返された戦乱はファインダム民衆国によつて統一され、その幕を閉じた。しかし、設立間もない新政府の力は絶大なものではなかつた。そんな時代の辺境エリア。幼き頃に父親を亡くし孤児院で育つた少年ルーカは、自分の生きる道を探すために旅立つことを決意した。さらに孤児院を旅立つたルーカを追い、よき理解者であり女友達のポロンが旅に加わつた。二人はレトンの町に向かう途中、事件に巻き込まれ、カイトという少年に出会い旅の仲間を増やすやがて、F・ハンターとなつた三人に、初めての仕事が与

えられた。三人は知恵と勇気、そして、友情を武器にして大いなる  
ものに立ち向かい信じた道を進んでいく少年達の物語

## 第一話 MY LIFE (前書き)

はじめまして亜輝です

この物語は一人の少年が少年のまま大人の世界へ飛び込み、その世界の中で生きていく誰もが経験していく過程を記したもので、楽しみ、苦しみ、悲しみ、疑問や誘惑その全てを素直な気持ちで受け止め地位や名声、立場などを大人では手放したくないものを見事に無視し自分の生き方を確立する少年を通して私自身ができない生き方を、もうひとつ生き方を共感してもらえたらしいなと思います

初投稿で納得いかない部分もあるかと思いますがよろしくお願ひします

## プロローグ

NC1943年、第二の太陽の下、大地と海のある豊かな世界口ストダム。人々は、その豊かな土地をめぐり争う。永きに渡り繰り返された戦いはファインダム民衆国とロックシス帝国の二大大国がお互いを牽制することで一時凍結状態となつた。しかし、この冷戦状態も永くは続かなかつた。ファインダム民衆国はロックシス帝国の重税に苦しむ国民を解放するために立ち上がつた。その動きに他の国々も同調し、ロックシス帝国に流れ込んだ。その数約50万、瞬く間に帝居は取り囲まれリーカンス4世はその権限を国民に返還した。（後に聖戦と呼ばれ人々に語り次がれる。）その後ロックシスの権限はファインダム民衆国に委ねられることになつた。この出来事がきっかけで他の国々からも指示を受けファインダム民衆国は世界を統一することになる。NC1954年ファインダム民主国設立である。

ファインダム民主国は統一戦争（聖戦）の指揮者であるアシルマを大統領に押し上げた。大統領の提案により世界を48エリアに分割し、首都を第1エリア、リベーブルにいた。しかし、48全てのエリアを統括出来るわけでもなく、いくつかのエリアでは一部分のみにしか介入できないのが現状であった。そのため民主憲法を制定し、人々の生活の安定を図るために数々の国際機関を作つた。さまざまな犯罪に対応するWPO（世界警察機関）。戦争によつて肉親を失つた子供たちを保護、育成するWWO（世界戦争孤児保護育成機関）。その他にも、開発、保健、水産、農林、運輸、治安維持、

ありとありえる国際機関をつくりさせた。WFO（世界猛獸対策機関）も、その中の一つだつた。アシルマ大統領はこの機関の長官に戦友であり動物学者でもあるルークを推薦するが、ルークはその地位を蹴つて猛獸対策捕獲官（通称・F・ハンター）として残りの人生をかけることにした。とは言え、新政府の力が未だ及ばない未開の土地もあつた。そんな場所は、豪族や昔からのしきたりが支配していた。

ZC 1961年・第26エリア、エリアの大半を深い森に覆われ、未だ開発が行われていないコーレス。ルークは長官の命を受け、生息が危ぶまれている全長6メートル・肉食鳥としては最大の怪鳥ソリツツを発見し調査するためにこの地に訪れていた。

「いたぞ、殺してもかまわん逃がすな！」

数人の男達が草木をかき分けて、ルークとその子供を追う。

「逃がすなよ。」

男達は必死に一人を追つていた。その少し前方、ルークは子供の手を引き、森の先、第28エリア、ヒュールファー国境に向かい走つた。右手にはF・ハンター専用68式ガンファーがしつかりと握られていた。やがてルーク達は深い森を抜け国境に架かる唯一の吊り橋が瞳に入ってきた。

「だいじょうぶか、あの橋を渡ればあいつらは手を出せない。」

ルークは草原を走りながら子供にやさしく言った。突然、後ろからいくつかの黒い筒状の物体が飛んできた。

「くそつ、ダイナマイトだ、伏せる！」

ルークは子供の体を覆うようにして伏せる。ダイナマイトは、ルーク達の頭上を遙かに飛び越して吊り橋の上に落ちた。  
(ドカーン、ドカーン)

(ザアザーンゴオー)

爆音とともに吊り橋は炎をあげ、谷底へと崩れ落ちて行つた。ルークはその一部始終をみとどけることしかできなかつた。後ろからはMSマシンガンで武装した男達、前は越えることのできない渓谷。

ルーク達はついに逃げ場を失つた。その時、

(バババババーン)

MSマシンガンの銃声が辺りに響き渡つた。

「うぐうーっ

ルークのズボンが赤く染まり、焼けるような激痛の末、足の感覚がじょじょになくなつていつた。痛みのため意識が薄れゆくなか、ルークは自分の手に持つていた68式ガンファーを両手で子供の手にしつかりと握らせた。

「よ、よくきけ、人は数百年に渡つて大きな過ちを犯してきた。たぶんこれからも身勝手な過ちを犯し続けるだろ。」

ルークは不安にかられ今にも泣きそうになる子供に微笑みながら言う。

「いたぞ！殺せ、ガキもいつしょだ。」

「奴等にもう逃げ場はない。じっくりいたぶつてやろつじやないか。」

男達は森を抜けると不適な笑みを浮かべ、走る事をやめてルーク達のいる場所へと近づいてきた。ルークは片足でふんばり男達を背に立ち上がつた。それはまるで子供を守る盾のよう…

(バババババーン)

「あっ、」

立ち上がつたルークの体に数十発の銃弾が打ち込まれた。ルークは全身を震わせながら手で口を塞ぐ。手の隙間からは大量の血が地面へと流れ落ちた。衣装はじょじょにどす黒く染まり、全ての感覚が麻痺していった。

(何だ、とても静かだ。・・・何も聞こえない。それどころかさつきまでの痛みすら感じない。)

ルークは自分の命が死ぬことを悟り、血のついた手でトレーディマークのカウボーイハットを抑え込むように子供にかぶらせた。

「お、おまえは、その過ちをどう受け止めるのかな。もう一緒に確かめる事はできやうにない。生きるよ。」

ルークは終始笑顔で言い続けながら子供を抱きかかえ渓谷の方へ足を向ける。子供の目から大粒の涙があふれる。一刻と追手がルーク達に近づいてきた。

「でつかくなつたな。」

ルークの震える手がカウボーイハット越しに子供の頭を軽く押さえた。「さよならだ、」

ルークは最後の力を振り絞つて子供を渓谷へと投げ込んだ。

「死ぬなよ。そして真実を見つめる。ルーク！」

やがてけたたましく銃声が鳴り響き、ルークは大地にその体を委ねた。

## 見え始めた未来

ZC1965年 ファインダム民主国28エリア、ヒュールファ  
ー南部小さな田舎の村グッズ。少年の物語はここから始まつた。

「それじゃあ行く。」

崖から投げ落とされたルークは、頭部に大怪我をしたもの奇跡的に助かり、この村の戦争孤児救済教会で今日まで保護を受けていた。頭部の怪我の後遺症か、断片的に幼少の記憶が飛んでいた。が、父が最後に言つた事だけは、はつきりと覚えていた。

「ルーク、何処か行く当てはあるの？」

シスターは胸で両手を握り祈るように尋ねた。

「行く当てはない。でも進むべき道はある。F・ハンターになる。決めたんだ。」

ルークは凜とした態度で言つた。ファインダム民主国は財政難のため民主社員を中枢部だけ残し解雇した。しかし人手不足が大きな問題となつた。そのため政府は一切の保障をしない、高額収入アルバイターを募集することに決定した。その一つがF・ハンターであつた。

「それがお前の決めた道なら、何も言う事はない。ほれ、これは返

しとく。それからこれ、もつていけ。」

園長はルーカに68式ガンファーと袋に入った少しのお金を投げ渡した。ルーカは孤児学園の門の前でみんなに手を振つて別れを告げた。カウボーイハットにロングブーツ、さながら開拓時代のガンマンと言つた格好。銀色の髪に淡い青い瞳。腰のホルスターには先ほど渡された68式ガンファーをぶらさげ、手荷物一つ持ちルーカは学園を後にした。

「もう15歳か、あのやんちゃ坊主が一人前になりやがつて。」ルーカが行つた後、園長は門の前で一人煙草をふかしながら遠くを見詰めていた。

「園長先生、ポロンちゃんがいません。」

「ふつ、あの御天馬娘。自分の道を見つけたようだな。」

園長は煙草を消して空を見上げた。遙か遠くまで見渡せそうな澄んだ空。この日、二人の子供達が孤児学園から新しい世界へと巣立つていった。

のどかな田舎道を遙か先にある町に向かつて北東へと進んだ。ヒューリファーを南北に分ける大河ガイサル川を渡り、森を抜けた。緑の木々がなくなり町までの最大の難所であるゴヘイズ砂漠が見え始めた時、一人の少女がルーカの後を追つて走つて來た。

「ちょ、ちょつと待ちなさいよ。」

その聞き覚えのある声にルーカは振り向いた。

「ポロン、そんな格好で買出しか？」

茶髪の小柄な少女は、茶色のロングコートに身を包み、肩から小さな鞄をかけ両手で大きな荷物袋を持つて息を切らせながら走つてきた。

「買出しのはずないでしょ。抜け出して來たのよ。」

ポロンは大きな荷物を降ろしてルーカの前で座り込んだ。

「抜け出してつて、まつ、いいか。でもよく追いついたな。」

「あんた方向音痴だから、同じ場所、何度も回つていたんでしょ。真直ぐここまで来ればそんなに時間はかかるないわ。」

ポロンは地図を出し現在地を指し示しながらルーカに説明した。その場で少し休んだ後、ルーカとポロンは町へと続く道を歩き出した。もちろんポロンに導かれながら・・・

学園を旅立つてから4回目の太陽が沈もうとしていた。

「今日はこの辺で野宿でもするか。」

「あー疲れた。」

二人はレトンの町まであと70km、（砂漠のへそ）と言われている湖の辺でキャンプすることにした。湖周辺には木々が芽生え、小動物がその恩恵を受けていた。ポロンは大きな荷物を地面におりし水辺に腰を下ろした。ルーカは、自分の荷物を降ろすと辺りの小枝を集め、火を熾した。そして来る途中に捕まえた川魚を串刺しにしてたき火の前に並べた。二人は夕食を終え今日一日の疲れをとるために早く寝ることにした。辺りは暗闇が支配している。唯一、焚火の明かりが一人を照らしていた。

ルーカが眠りに就くか、就かないか、の時、まだ眠りに就けないポロンは体を起こし、口を開いた。

「最近（金髪の狼）って言う正義の味方が出るって噂なのよ。ルーカ、」

ポロンはカウボーイハットを顔の上に置き、焚火の側で眠りにつこうとしているルーカに話し掛けた。最近、巷を騒がせている姿無き英雄の噂話に瞳を輝かせていたのだ。

「知らないよ。」

「あー、一度あってみたいな。それでね・・・」

ルーカのそつけない返事など気にしないポロンは、一方的に話し続けた。こうなつたポロンを止める手立ては無い。仕方なく眠い目を擦りながらルーカは話しを聞いた。

やがて月が西に傾き、静けさと暗闇が凌駕する深夜となつた。

「あれ、ポロンこんな夜更けに何所に行つたんだ。・・・まつ、いか。」

ルーカはカーボーカットを深くかぶり眠りにつこうとする。

(ガサガサ)

その時ルーカは、周囲の草を踏みながら何者かがこちらに向かつて来ていることに気づき飛び起きた。一人の足音ではなく、複数の感じだつた。

「だれだ、」

ルーカは腰にぶらさげていた68式ガンファーのトリガーに指をかけた。

「だれだつてよー、どうする兄弟、」

「有り金、もらつていきましよう。コルネ兄貴。」

暗闇の中から五人の黒いマントを纏つた男達が現れた。その中の一人は身長2メートルほどの大男。左眼に眼帯をはめ髭をはやし殺気がにじみでていた。

(まちがいなく、この一団で一番強い)

ルーカは瞬時にそう感じた。

「ほおー、ガキじゃねえか。それにどう見ても金なんてもつてなさそうだぜ。」

「明かりが見えたんで来てみたらこれだ、ついてねえーな。」

「帰りましょう、コルネさん。」

「ふつ、今日は一仕事して疲れてるんだ。小物に用はねえ。運がいいぜ、小僧。」

どうやらこの辺をねぐらにしている山賊らしい。賊はルーカが何も持つてないと思い、この場を去ろうとした。

「ぬうーん、お前らちょっと待て。」

賊の一団が立ち去ろうとした。その時コルネはルーカの腰にぶらさがっている68式ガンファーに気づき手下を停止させた。

「おい小僧、良い物、持つてるな。ちょっと見せな。」「やだね。」「やだね。」

ルーカは素早く68式ガンファーを抜き我流であみだしたトンファ一円舞の構えを取つた。

「小僧、俺をだれだと思つてんだ。」「

コルネは愛用のW&Wリボルバーをホルスターから抜き、照準をルーカに合わせた。

「おとなしくしてりやあ調子に乗りやがつて、」

手下達も銃を構えルーカに照準をあわせようとするが、ルーカは素早く身をかがめ横に飛んだ。手下達はルーカを見失った。次の瞬間ルーカのガンファーが手下の二人を打ち倒した。

「残り、三人。」

ルーカはコルネを見てにつこりと笑つた。コルネもそれに答えるよう薄笑いを浮かべた。手下達はこの光景に後ずさりをした。

「ルーカ、なんだか騒がしいけど、」

「しまつた。ポロン逃げろ！」

ポロンが、今の状況をしらずに賊の後方からルーカの元へと帰つてきた。

「おつと、動くなよ。」

賊の一人が素早く逃げるポロンの腕を捕まえ、こめかみに銃を突きつけた。ルーカはどうすることも出来ず、68式ガンファーを降ろし、構えをといた。

「このガキが！」

（バコツ！）

賊の一人がルーカの頭を銃で殴りつけた。ルーカは吹き飛ばされ倒れた。うつぶせに倒れたルーカの手にはしっかりと68式ガンファーが握られていた。

「ルーカ！」

ポロンは賊の手をほどきルーカの所に行こうとするが、賊の手はびくともしない。そのうちに、賊の一人が68式ガンファーを握つているルーカの利手を踏みつけガンファーを取り上げた。

「洒落たもん、持つてんじやねえか。」

（ボコツ）

賊は倒れ込んでいるルーカの横腹を蹴り上げた。ルーカは痛みで顔をゆがませながらあおむけになった。コルネは68式ガンファーを

持つてルークから離れた。

(ボロッ、バロッ)

「いじつ、ふざけたまねしやがつて。」

「よくもやつてくれたな。」

「俺達をあまくみるなよ。」

手下達は、あおむけになつているルークを痛めつけた。ルークは、みるみるうちにぼろぼろになつていった。

「そのへんでやめておけ。」

コルネはそう言つて、手下達をさがらせた。

「小僧、こんどからは調子にのるんじゃねえぞ。命だけは残しどいてやる。」

コルネは、ぼろ雑巾のよつになつたルークをみおろし睡をはきすてた。

「おい、かたーついた。その嬢ちゃん放してやれ。」

ポルネは手下にポロンを解放するように言つた。

「ほりよ。」

「ルーク大丈夫」

ポロンはあおむけになり傷ついているルークに駆け寄つた。ポルネ達はルークのガンファーを奪い闇の中に姿を消していった。

「ま、まちやがれ、」

ルークは掠れた声でそう言つと、ゆつくりと目を閉じだまつこんだ。

「ルーク大丈夫、ルークしつかりして。」

ポロンはあわててルークの胸に耳をあててみた。

「どうやら痛みで氣絶したみたいね。」

ポロンはルークの服とカーボーカハットをそつと脱がした。体じゅうアザだらけになつていて、銃で殴られた時にでた頭の出血はそこまでひどくないが、蹴られた脇腹は、紫色に変色し局部的にはれあがつていた。

「なによこれ、凄い腫れあがつてゐるじやないのよ。いそいで医者にみせなきや。」

ポロンは氣絶したルーカと持てるだけの荷物を持つて暗闇の中すぐさまレトンにむかつた。しかしポロンにルーカと荷物は重すぎてなかなか先に進む事が出来ずにいた。

(ドサツ)

「もう、あるけない。」

数キロ歩いた所でポロンはついに力尽き、倒れた。

地平線の彼方に赤味が射し、広大な砂漠の温度が上がりはじめた。ポロンはルーカと共に砂の上にうつ伏せて倒れていた。

(サーサーサ)

砂を滑るような音が聞こえ、黄色と黒の体をくねらせ砂漠の毒蛇、虎蛇がルーカの元に近づいてきた。夜行性の生物達が壠である岩陰を探し移動を始めていたのだ。ポロンの目にはしつかりとそれが映るが、ルーカをかばうことすらできなかつた。意識の無いルーカの腕に虎蛇が噛み付こうと牙をむき出しにした。

(ザクツ)

「おい、しつかりしる、生きているか。」

危機一髪のところで、虎蛇の頭部をナイフが突き抜け、砂漠に突き刺さつた。

「ほつ、」

安堵のため息を吐いたポロンの側に、一人の男が声をかけてきた。

「あなたは、」

ポロンは力を振り絞り、顔を上げた。そこには数人の白いコートの男達が馬から降りて立つていた。その身なりは清潔感があり、行動も迅速、何よりも統制が取れていた。軍隊か私設警察である事はすぐ分かつた。

「カイト隊長、生きています。」

白いコートの男達がポロンから少し離れる。そして、赤いコートを着た少年がポロンに近づいて来た。その少年の髪は金色で短く、青い瞳。身長は160cmほどの美男子。襟元には一つ星の襟章がつけられていた。

「大丈夫かい。」

少年はそう言うと優しそうに笑い手を差出した。しかし、その眼は寂しさと冷たさを内に秘めたようだつた。

「あ、ありがとう。あなたがたは、」

「紹介が遅れたみたいだね。僕達はヒュールファー第一保安隊。そして僕が隊長のカイトです。」

その間にも他の隊員は手際よくルーカの様態をみていた。

「隊長、この少年の様態は思わしくありません。速やかに病院に運ばないと命にかかわります。」

「よし、一人をレトンに運ぶぞ。」

保安隊は一人を慎重に馬にのせ、この場を後にした。

ヒュールファー第一の都市レトン。都市と言つても人口1000人ほどの小さな町。周辺には数々の遺跡と温泉があり、シーズンには人口の10倍ほどの人達が町を埋めつくす。しかし今、この町には観光客は一人もいない。町はまるでゴーストタウン。

「この町やけに静かね。」

「奴等がこの辺りに現れてからこのありますまです。」

「奴等つて、」

「いや、あなたが気にすることではありません。それよりお連れの方を速く医者に見せなければ。」

カイトは拳を握り締め怒りを表に出した。

カイト達は、ルーカとポロンを病院に連れていった。

「ここです。たぶん驚かれると思います。」

町の景観を損なわないようにつくられた小さな病院。カイト達は一人を連れて病院の扉を開けた。

「ちょっと、どいて。」

「急いで第一処置室に運んでください。」

病院に入るとそこは、まるで野戦病院のような忙しさであった。多くの人が並べられたベッドに横たわっている。

「こりゃーひどい、すぐに第一処置室に。」

「ジンさん、看護士さんの指示に従ってください。」

扉を開けてすぐに一人の看護士がルーカの事に気づき駆け寄つて来た。看護士の的確な対処でルーカを一番近い処置室に保安隊員の手をかり運んで行く。ポロンも心配そうにその後を追う。

「着ているもの全部とつてくれ。」

「頭部化膿止め、射つてくれ、」

「はい」

「先生、麻酔がもうありません。」

「しかたないな、少年、少し痛いが我慢しろよ。」

2時間ほど経つてようやく全ての処置が終わつた。ルーカは病室のベッドに移され静かに眠りについた。

「ありがとうございました。」

「それより、かなりひどい状態だつたよ。アバラ2本に全身打撲、右手はヒビが入つてているようだ。まつ命に別状はないが、誰にやられたんだ。」

「えつと、確かコルネって言つてた。」

その言葉を聞き、ポロンに付き添つていたカイトが頭を抱えた。先生は部屋を出て行く。入れ替わりで保安隊員がカイトのもとにやつてきた。

「なんだつて、西の町に昨日コルネが現れたつて。」

「コルネって何者なの」

「コルネは盗賊団の頭です。最近この辺りに現れたのですが、かなり腕がたつらしくて3つの保安隊がやつによつて壊滅をせられています。」

「そんなに凄いやつだつたんだ。」

「でも心配にはおよびません。あなたはその少年の側で看病していってください。」

カイトはそう言つて部屋を出て行つた。依然、ルーカは静かに眠つたままだつた。

それから一日後第一保安隊詰め所、隊長室。カイトは机に座り、

「コルネ盗賊団の行動データーを分析し、次の出没先を考えていた。

「カイト隊長、コルネ盗賊団の隠れ家を見つけたとの情報が、第十六保安隊からはいりました。」

一人の隊員が慌ただしく隊長室へと入つて来て、カイトに連絡書を渡した。

「失礼します、本部から第十六保安隊への支援要請が届きました。」

立て続けに他の隊員も扉の前で敬礼し、カイトのもとにやって来た。

そして、本部からの伝令を告げる。

「全隊員に緊急招集をかけてください。今から第十六保安隊の支援に向かいます。」

カイトは立ち上がり、背中のホルダーに短く不格好な木刀をさし、それを覆い隠すように赤いコートを纏つた。

「第一保安隊出動。」

カイトは詰め所前に集合した保安隊員に号令をかけた。

コルネ盗賊団の隠れ家はレトンから東に30kmほど行った紅の森にいると言つことだつた。カイト達第一保安隊はコルネ盗賊団の隠れ家に向かつた。これまでの戦闘でぼろぼろになつたジープ1台と茶毛や白毛の保安馬4頭、そしてもう一頭カイトが跨る額から鼻筋に通つた大きな十字傷がまるで勲章のような黒い保安馬ラナウェイで向かつた。

「隊長、前方から保安馬が走つてきます。伝令馬だと思います。」

前方を走つていたジープがカイトの乗つているラナウェイに近づき報告した。

「無線を使わず伝令をたてるとは、第十六保安隊の隊長はたしかダッジさんでしたね。僕達が行くまでもなかつたと言つことですね。」

カイトはうつすらと笑いを浮かべた。しかしカイトが曰にしたもののは、保安馬の鞍にぶら下がつた血だらけの保安隊員が砂煙舞う砂漠から走つて来る姿だつた。カイトは隊を停止させ、馬を止め隊員を鞍から降ろした。

「どうしたのですか。第十六保安隊はどうしたのですか。」

降ろした隊員に応急処置をほどこし、紅の森で何がおきたのか理由を聞くカイト。その隊員はかすれた声でカイトに現状を報告した。

傷ついた隊員をジープにのせ、第一保安隊は紅の森に急いだ。

紅の森・・・サボテンの一種で高さ十数メートルほどの紅色の砂漠植物、赤サボテンが數キロにわたって咲き乱れていた。紅の森に近づくにつれて、カイトの表情は重く険しいものに変わつて行つた。悲惨な真実をまのあたりにしたのだ。第十六保安隊員、十数人が無残なありさまで倒れていた。すぐに第一保安隊員はカイトを残し、ジープや保安馬から飛び降り現場検証を始めた。

「隊長、生存者がいました。」

一人の隊員が生存者を見つけカイトを大声で呼ぶ。カイトはラナウエイから飛び降り、倒れている者の元へと急いだ。そこには頭から大量の血を流し、今にも意識を失いそうな第十六保安隊隊長ダッジが横たわっていた。

「これはいつたいどう言つ事ですか。」

カイトはダッジを抱きかかえ事情を聞いた。ダッジは表情を歪ませながらカイトの袖を掴んだ。

「わ、わが、隊は、コルネ盜賊団に、か、壊滅させられた。お、お前らは、」

「私は、第一保安隊長カイトです。それで奴等は、コルネ盜賊団は。

「傷ついたダッジは震える手である方向を指差し、氣を失つた。カイトは唇を噛締め体を小刻みに震えさせた。

（悪を許すな。悪は全滅せろ。）

そんなカイトの脳裏に、いつもの低く暗い声が響いてきた。

「うつ、」

カイトは俯き両手で頭を覆つた。指の隙間から出た髪の毛が微かに輝いた。

「た、隊長、隊長、」

「はつ、」

隊員に声をかけられ、カイトの髪が元に戻り、意識が現実へと帰ってきた。

「隊長、ジープの用意が出来ました。速くダッジさんを乗せてください。」

「あ、ああ、そうでしたね。お願いします。」

カイトは気絶したダッジをジープに乗せた。そして指差した方角を悔いるように見た。その方向には、このエリアで最も大きくそして、レトンの側を流れ水源にもなっているハンバルド川があるだけだった。

「まさか、奴等、川を溯つてレトンを襲撃する気じゃないのか。まずいクリスさん、至急レトンに避難勧告を、」

「わ、解りました。」

カイトはラナウェイに飛び乗りレトンに向かいはしり出した。

「私は、先に戻ります。後のことば頼みます。」

「了解しました。迅速に処理した後にレトンに戻ります。」

そのころ、何も知らないレトンの町はいつもとかわらない静かな一日が過ぎ去っていた。そして、病院では・・・

「ここには、どこだ。」

ルーカが永い眠りから目覚めた。

「ルーカ、気がついたんだね。よかつた。もつ、心配したんだよ。」

「ポロン、俺はどうしてこんな所にいるんだ。」

その時、先生が往診にルーカのいる部屋へと入つて來た。ポロンは慌てて先生の所に駆け寄つた。

「先生、ルーカが変なの。今までの事、覚えてないみたいなの。」

「今までつて、ああ、たぶん打撲による一時的な記憶喪失だな。直に回復する。」

その言葉にポロンは安心する。先生はルーカの側にいき診察をはじめた。

(バタン)

ルーカの病室の扉が勢い良く開き、看護婦がけたたましく部屋にか

けこんできた。

「先生大変です。保安隊から避難勧告がだされました。」

「なに、どう言つ事だ。」

「コルネ盗賊団がこちらに向かっているとのことです。はやく避難を。」

「コルネ、コルネだつて、あの野郎。」

突然ルークは何かを思い出したように、ベッドから飛び起き、外に向かおうとするが、体制を崩し倒れ込んだ。

「いつ、いてーつ」

「何やつてるの、あなたは重傷なのよ。そんな体でどこに行こうとしてるの。」

ポロンはルークの肩に首を入れて立たせようとするが、ルークはその行為を振り払い、服を身につけ始めた。包帯だらけの体覆うように服を着るとトレードマークのカウボーイハットを深くかぶつた。

「ちょっと、本当にに行きなの。」

「ああ、取り返さなきやあならない物があるんだ。」

ポロンはそれ以上聞くこともなく病院関係者とともに町の東側にある防空壕を目指した。

一人この町に残ることを決意したルークは見渡しのよい病院の屋上で時がくるのを待つた。やがて銃声が、乾いた空に鳴り響き静けさを引き裂いた。

「やつときやがつた。」

コルネ盗賊団、バイク18台ジープ2台、人数は23人、顔じゅう傷だらけの者、マスクを着けている者、煙草をふかしている者、その全員が銃を携帯していた。

「一人、二人・・・こりやちょっと多いな。」

ルークはいい考えが浮かばないまま屋上からコルネ盗賊団の行動をそつと監視することにした。しばらくして、コルネは3人の手下を残し、二人一組で町の様子を見にいかせた。

「コルネの野郎、俺のガンファーをもつてない。てつことはアジト

にあるつてことだらうな。でもどうやつて、そつだ、あいつをつかつて、」

ルークは散つていつた手下の中から一組の男達を目で追つた。方向を確認したルークは病院の裏口から他の手下に見つからないように出た。そして最善の注意をはらいながらその男達の後をつけた。男達の一人はルークとあまりかわりのない体格をしていた。しかも顔をマスクで覆つているため入れ替わつてもばれる確立は少ない。そう考えたルークは、男が一人になるのを待つた。

「よし、視界から完全に外れた。今がチャンスだ。」

マスクの男が仲間と別れて建物の中に入つて行つた。ルークは建物の裏口から中に入り、男の後ろに忍びより軽く肩を叩いた。男は仲間の一人だと思い、警戒もせずに後ろを振り向いた。その瞬間、ルークは拳での鋭い一撃をみずおちに打ち込んだ。

「うぐうーううつ、」

男はその一撃でその場に倒れ込んだ。ルークはすぐさま自分の服と取り替え、最後にマスクをつけ変装は完璧なものになつた。あとは氣絶している男の口を病院から持つて来たテープで塞ぎ、体を縛り上げ、建物の軒下に放り込み、全ての準備が整つた。

「おい、そつちはどうだつた。」

変装を終えたルークの元にもう一人の仲間が現れた。  
(やばい、しゃべると全てが水の泡になる)

そう思つたルークは手を交差してジェスチャーで答えた。

「そうか、解つた。しかし、今年のかぜは大変だな。日に日にやつれているように見えるぞ。」

仲間はそう言つて変装しているルークの背中をポンと叩いた。どうやら、男は顔を隠すためではなくかぜのためにマスクをしていたようだ。

「たつくよー、人子一人いやしねえ。しょうがねえ戻るか。」

二人は先ほどの集合場所へと戻つた。

集合場所に戻るとルークとともに行動していた男は町の様子を口

ルネに話した。しばらくしてコルネはルーカの方に近寄り肩をポンと叩いた。そして、不信な笑みを浮かべ他の仲間のもとに歩いていった。カイトからの避難勧告が功を奏し町にはだれもいなかつた。しかも、現金はおろか金目の物すらなかつた。

「くそつ、お前ら今日は引き上げるぞ。」

コルネはしかたなくレトン襲撃をあきらめアジトに戻ることを仲間達に告げた。

その決断が、良かつたのか、それとも悪かつたのか、カイトがこの町に辿りついたのはコルネ盗賊団が撤退して数分後だつた。

カイトは町に入るとすぐに町の中央広場にある掲示板を覗いた。一見ただの連絡が載つていてるようだがその中にこの町の、しかも限られた者にしか解らない暗号が記されていた。

「東の防空壕」

その暗号には、そう記されていた。カイトはその場所に危難が去つた事を知らせに走つた。途中、遙か西に砂煙を見つけるが、今はコルネ盗賊団よりも町の人達を優先した。

「市長、危難は回避できました。」

「コルネ、コルネ盗賊団は捕らえたのか。」

「いいえ、残念ながら。しかし奴等のアジトの検討はつきました。体制が整いしやすい討伐に向かいます。」

市長は市民に危難が去つた事を告げた。安心の笑顔がみんなに戻る。その中、ポロンはカイトを防空壕の外に連れ出し、ルーカの事を知らせた。

「なんだつて、一人で、そんな無茶にも程があります。なぜ、止めなかつたんですか。」

「だつて…」

ポロンはカイトに理由を話し、ルーカの応援を頼んだ。カイトはポロンの頼みを聞き入れ、ラナウェイに向かい歩き出した。

「それじゃあ、あとの伝言頼みます。」

「でもカイト、コルネ達の居場所なんて判るの。」

「ええ、さつき解りました。たぶん奴等の本当のアジトはここから西に50kmほど行つた所にある遺跡発掘者の村、忘れ去られた村バイソニア、そこに間違はありません。」

カイトはラナウェイに跨りバイソニアを目指した。

「コルネ盗賊団の一人に成りすまし、アジトに向かつているルーカは、沈黙を守り続けバイクを走らせる。遺跡を横目に1時間ほど行くと荒れ果てた小さな集落が見えて来た。盗賊団はその集落に入つて行つた。無論ルーカも、である。遠くからはとても人が生活しているようには見えなかつたが、その中では数十世帯の人達がひつそりと暮らしていた。村はジープなどのスクラップに囲まれ、ただ一個所、手動で動く装甲車がこの村に入るゲートになつていて。村に入ると中央広場に続く道があり、その広場を中心には十字路が、コンクリートの家々を四つのブロックに分けていた。人々はコルネ盗賊団が町に入つてくると扉を開け飛び出して来た。

「コルネさんおかえりなさい。」

「おどうさん、おかえり。」

「あなた、ごくろうさま。今回はどここの町に行商にいったの、」

「最近は盗賊がでるらしいから心配してたのよ。」

人々は自分達の大事な人の場所へと急いだ。そしてそれぞれの家庭へと戻つて行つた。まるで、盗賊団のことなど知らず、ただ出稼ぎから帰つて来た父親を迎えるように。ルーカのもとにも一人の少女が駆け寄り、手を引つ張つた。ルーカは一言も口を開かずに少女が引っ張つて行く方向に足を向けた。ある扉の前で少女は足を止めた。そして扉を開け中へとルーカをその小さな細い腕で、押し入れた。家中には老婆がこちらを見て座つていた。

「おかえりロンド、」

老婆は途中で言葉を止めた。

「ステニーちよつとの間、広場で遊んでおいで。お父さんとお話があるから。」

「はい、おばあちゃん。それじゃあ、行つてくるね、お父さん。」

ステニーはルーカに手を振つて家を出て行つた。老婆は立ち上がり、部屋のカーテンを閉めルーカの方を向いた。

「お兄さん、保安隊の者かね。」

「いいえ、違います。・・・あつ」

老婆は驚きもせず、また椅子に腰掛けた。ルーカは変装がばれいる事に気づき、ゆっくりとマスクを外した。そして、曇り無き瞳で老婆を黙つて見つめた。

「あの、俺は、」

「そんな場所に突つ立つていたら、他の者にばれてしまつよ。兎に角こつちにおいて。」

老婆は笑顔を見せるわけでも、怒りで顔を強張らせるわけでもなく、無表情でルーカを奥の部屋に通した。部屋には、古びた机と小さな椅子、あとはベッドが置かれているだけだった。老婆はベッドの布団を捲り、ルーカに入るよう勧めた。ルーカは勧められたことをためらいなく受け入れた。老婆はルーカがベッドに横たわると、ゆっくりと布団を頭まで被せた。

「これで誰が来ても心配はいらないよ。さあ、話しておくれ。」

そう言つて老婆は近くにある小さな丸椅子に腰を下ろした。ルーカは布団越に今までのことを話始めた。ゆっくりと、時はながれた。老婆はただ静かにルーカの話に耳を傾けた。1時間ほどでルーカの事、コルネ盜賊団の事、全ての真実は語られた。

そのころ、カイトはパインソニアの近くまで来ていた。ラナウェイを停止させ、あたりを見渡した。小高い丘を見つけ、その場所にラナウェイを走らせた。丘の上につくとカイトはラナウェイから降り、時より吹く強い風に、赤いロングコートを靡かせながら辺りが暗くなるのを待つた。

（ルーカ、早まらないでくださいよ。ポロンさんのためにも無事でいてください。）

ルーカの話が終わり、ただ黙つて肯いていた老婆はこの村のことルーカに話しあじめた。ルーカはベッドから出ると、ベッドに腰

掛けた。

当時、この地方は観光地としての開発に、発掘が重要視された。政府は発掘隊を結成し開発にのりだした。その拠点としてこの村パインソニアがつくられた。その資金は政府が負担し、多くの者がこの村で生活を始めた。それから3年の月日が過ぎ去ったある日、政府は財政難に伴い、いくつかの制令を発表した。その中の一つが財減令であった。この制令により開発はストップ、発掘で政経を経てていたこの村の財源は絶たれてしまった。最初は違う産業を起こして村の存続をはかるうとしたが、どれも失敗に終わった。しだいに人々はこの村を去っていき、残った者達も働く事をやめ、村は絶望の淵に立たされた。その時、一人の男が立ち上がった。その男は、村に残っている若者を集め一つの組織を作り、「出稼ぎに行つてくる。」

そう言い残して村を出ていった。数週間が過ぎたある日、男達は傷だらけになつて大金を持ち帰つた。どこに行つてきたのか、何をしてきたのか、誰一人、聞くものはいなかつた。ただその勇士をたたえた。

「こうして、この村は政府から見放されながらも新しい道を歩き、そしてここまで辿りついた。」

老婆は、話が終わると静かに部屋を出て行つた。隣の部屋から物音が聞こえ、その音が止み老婆がゆつくりと部屋に戻つて来た。その手に、N S式ライフルを持つて・・・

「これがこの村の歩んだ道、でもねえそれがこの村を支えてきたんだよ。だからコルネの行為は正しいんだよ。あなた達がどう見ようと、村の者はみなコルネの言うことだけが真実だと思つてる。」

老婆はそう言つと、震える手でN S式ライフルの照準をルーカに合わせ、トリガーに指をかけた。

「今ある私達の生活を、真実を壊しても、それでも行くのかい。」

「それがこの村の真実でも、俺はいかなくちゃならない。俺には間違えだと思うから。」

ルーカはベッドから立ち上がった。老婆はルーカの行動に合わせてライフルの銃口を動かした。

「間違えだと言うの。」

「うん、たぶんね。だから、それを確かめるためにも行くよ……俺。」  
ルーカはライフルなど気にせず、老婆の横を通り過ぎた。老婆はルーカの曇り無き瞳にみいられ、NSライフルのトリガーから指を外し、銃口を降ろした。

「ちょっと待ちなさい。ルーカ、裏口から出て一番東の倉庫に、コルネはいつも荷物を閉まっているよ。」

表の扉に向かうルーカを、振り向くことなく呼び止めた。ルーカは黙つてマスクをつけ裏口へと向かつた。

「まさか、今すぐ行く氣かい。まだコルネ達はそこにいるんだよ。せめて、日が暮れてから……」

「そう言う訳にはいかないよ。確かめないといけないんだ。そうだろ。」

ルーカはそう言い残して裏口から出て行つた。老婆は少しの間黙つて扉の前に立ちつくしていた。

「どうしてだろうね、言つている事も、やつてている事も、むちゃくちやなのに不思議だね。あの子ならこの村をかえてくれるかもしれない。」

老婆はルーカの出ていった扉を見つめ、そして手を合わせ天に祈つた。ルーカの無事を祈つたのか、それとも村の行く末を祈つたのか、それは老婆にしか解らなかつた。

ルーカは裏口から出ると、他の者に見つからないように足音をたてず東の倉庫に近づこうとした。周りの家屋では、戻ってきた夫や、息子を囲みその無事を喜び合つていた。普段ならゲートや中央広場にいるはずの見張り役も、今日ばかりは家族団欒を後に回す者はいなかつた。その時、一人の男がルーカの後ろに忍び寄つてきた。一瞬、ルーカは後ろにとてつもない気配を感じ、本能的に前に飛び、受け身を取りながらストレンジャーとの距離をとろうとした。しか

し、そこには、だれもいなかつた。それどころか、先ほどよりもはつきりとした気配が殺氣であることに気が付いた。殺氣はルーカの首筋に冷たく突き刺さつた。ルーカは死を確信した。

「いい反応ですね。機会があればお手合せ願いたい。でも今は静かに、ゆっくりと後ろを向いてください。妙なまねをすれば命の保障はできません。」

ルーカは言われた通りにゆっくりと後ろを向いた。その男、いや少年はルーカを見ると安心したような顔で木刀を背中にしまい込んだ。「ルーカ君だね。私は第一保安隊のカイトと申します。あなたのことは、ポロンさんから聞いています。それにあなたが気を失つている時に何度も御会いしてきましたしね。」

「てつ、事は見方。」

カイトはとりあえず人気のない建物の裏手にルーカを連れていった。そして、ルーカは今までのこと、これから確かめないと云ふことをカイトに話した。

「そんな、一人でなんて無茶です。」

カイトは、小声で言いながらルーカの目を見た。

「もう、止められそうにありませんね。でも危ないと感じた時、あなたにどう思われようとも手を出しますよ。ポロンちゃんと約束したから、あなたを無事に連れて帰ると・・・」

誰もいない建物の片隅で、ルーカとカイトの間に男同士の約束事が交わされた。少しの時間一人は無言で見詰め合い、やがて何かを感じたように、コルネのいる東の倉庫に移動を開始した。二人は最善の注意を払いながら目的地まで走りぬけた。

「しかしカイト、お前その派手な格好ちょっと目立ちすぎないか。」

「えつ、そうですか。じゃあ、こうします。」

カイトはルーカに服装を指摘され、しぶしぶ赤いロングコートを走りながら裏返しにした。赤いロングコートはリバーシブルで黒いロングコートに早変わりした。

村の中央広場から東に20mほど行ったところに位置するこの倉

庫は、ゲートから最も離れた建物だった。高さはこの村にあるどんな建物よりも高く聳え、正面には出入り口の鉄扉、その横には約5m幅のシャッターが見えた。ルークは東の倉庫まで来ると、出入り口である鉄の扉に耳をあて、中の様子を静かに伺つた。物音一つ聞こえない異様な静けさにルークは正面から入ることを断念し、他の侵入口を探し建物の裏へと最善の注意を払い向かつた。裏にまわつてもコンクリートの厚い壁があるだけで、入れそうな場所など見つからなかつた。ルークはしかたなく正面の扉から入ろうと方向転換した。その時カイトが親指を上に向けて、地上から2mほどの所に開いている喚起窓を指差した。

「ここから、入れそうだ。」

ルークは周りをきょろきょろと見渡し人がいない事を確認すると、すかさずジャンプして喚起窓にとびついた。そして、気づかれぬようそつと腕で体を持ち上げ顔を窓から顔を覗かせた。

「どうやら、誰もいない。カイトちょっと行くから、お前はここで待つてくれ。」

ルークはそう言い残して窓枠に顔を突っ込んだ。喚起窓は見た目より幅が狭く、ルークの体ですらギリギリのようであつた。途中、ベルトが窓枠に引っ掛けかり一時は身動きとれずにいたが、体をむちやくちやに動かしどうにか中に潜入できた。ルークは辺りを見渡した。部屋にはいろいろな荷物や移動のために使つていたバイクやジープが置かれており、倉庫兼車庫のようであつた。

ルークは倉庫の中を一通り見渡した後、ふつと後ろを向いた。

「うわっ、力、カイトいつからいた。」

「外にいるより一緒のほうが、ばれる確立が少ないと思います。」

カイトは音も立てずにルークの後ろに忍び寄つていた。ルークはカイトの発言におされながらも、一つ一つ静かに荷物を開けガンファイアを捜し始めた。カイトは一階に続く階段の側でルークがばれないように見張りについた。

「くそつ、いくら捜しても見つからない。ここにはないのか。」

ルークにあせりが見え始める。その時、二階の階段を見張っていたカイトが突然ルークの口を塞ぎ物陰に押し倒した。

(ガチャツ、カツン、カツン)

「それじゃあ、俺達は帰ります。コルネさんも今日はゆっくりしてください。」

「ああ、お前等も体に気つかえよ。」

数人の男達コルネに挨拶をすませ倉庫の鉄扉から出ていった。男達が出ていった後、倉庫また静けさを取り戻した。

「痛つ、知らせる時もう少し丁寧に頼むぜ。」

「あははは、それよりも今なら他の奴等に気づかれずコルネの元に行けますよ。確かめたい事あるでしょ。」

カイトは暗がりの倉庫の中でルークに笑いかけた。

二人はその場から立ち上がり倉庫の端にある螺旋階段の方へと歩いた。カイトは螺旋階段の前まで来ると、男達が出ていった鉄扉の鍵を開けた。

「ここからは、あなたの問題でしたね。助けはいらないのでしょうか。」

「悪いな、カイト、用が済んだらコルネは引き渡すよ。」

「そうしていただくとありがたいです。私は邪魔が入らないように外で待っています。なるべく早くお願ひしますよ。」

カイトはそう言い残して外へと出ていった。ルークはカイトを残し、一人音もたてずにコルネのいる二階へと向かう。ルークは二階へ着くと、身を低くして中の様子を伺つた。中では人の喋り声はおろか、物音一つ聞こえなかつた。ルークの手がそつとドアのノブに掛かつた。

「誰もいねえよ。はいってきな。」

その声は紛れも無くコルネのものだつた。ルークは躊躇することなく、すぐに立ち上がりノブを回しドアを開けた。ドアを開けると煙草の煙がルークを歓迎し、その先にソファードに深深と腰掛けたコルネが待ち構えていた。

「ふつ、まつたく馬鹿正直なやつだな。待ち伏せしていたかもしないのによう。」

「そう言えば、そうだな。考えもしなかつた。」

「ふつ、はははは、」

「くすつ、くつ、はははは、」

二人は、煙たちこめる部屋で少し言葉を交わした後、親しげに笑つた。しばらく、二人の間に穏やかな時間が流れた。コルネは煙草を消し立ち上がり、ロッカーから68式ガンファーを取り出した。

「ほらよ、お前が聞きたいのはこんなことじやないだろ。」

コルネは苦笑いをしながら、68式ガンファーをルーカに投げ渡し、胸からだした煙草に火をつけた。ルーカはそれを受け取ると、腰のホルスターにしまいこんだ。

「聞きたきやあ、そいつで俺に聞いてみな。」

「そうするしが二人にとつて、一番良いはずさ。」

コルネの口つきが変わり、それ以上何も言わずただ顎でルーカに（ついてこい）

と言つしげさをとつた。一人は部屋から出て一回へと降りて行つた。二人の戦いが今始まるとしていた。

倉庫から少し離れた廃屋の影にカイトは隠れていた。この廃屋は倉庫とそこへと続く一本の道を見ることが出来る唯一の場所。早期対応をするにはここ以外に有得なかつた。カイトは息を殺してただひたすらにルーカの帰りを待つていた。倉庫からは物音一つ聞こえず、周囲からは家族の和やかな会話が風に乗つて聞こえて來た。

（やけに静かですね。：ん、まずいですね、）

カイトは、人の気配を感じ建物の影に隠れ、様子を伺うことにした。やがて、男達がコルネのいる倉庫に近づいて來た。カイトはちらつと倉庫を見て、裏に回り中央広場の方に向かつて走つた。そして、男達の後ろをとると素早く一人の男の腎臓に重い一撃をいた。男に激痛が走り声を立てることなくその場に崩れ落ち氣を失つた。

「な、なんだ、てめえは。」

「すみません。あなたにも眠つてもらいますよ。」

もう一人の男は仲間が突然倒れ込んだ事に驚き視線を後ろに向けた。視線の範囲にカイトが映り、銃を抜こうと腰のホルスターに手を走らせた。それより先にカイトは木刀を背中から抜き、男のみずおちに正確な一撃を突きいた。男は銃に手をかけることなく白目をむき一瞬のうちに地面の上に倒れ、砂煙が巻き上がった。カイトは、その二人を無人の建物に引っ張りこもうとした。

「おい貴様なにをしている。はつ、そのロングゴート敵だ、保安隊だ。」

その時、近くの建物から一人の男が出てきて、その異常に気がつき声を上げた。すぐに、辺りの建物から男達が銃を片手に飛び出した。（しまつた。兎に角、今は時間を稼がないといけないようですね。）

「おい、非常事態だ。出口を固める。生きてこの村からだすな。」

民家の窓や扉は堅く閉ざされ、男達が慌ただしく動いた。

（少し多いですね。これだけの男達を相手に手加減してどこまでやれるか。この状況を回避するにはコルネを押さえればいいんだが、ルーカ急いでくださいね。）

すでに、カイトの前方には十数人の男達が銃を構え、今にも発砲しそうな状況になっていた。カイトは得意の隠密行動で一人ずつ気絶させていくことが最善の方法だと考え、その場から離れ建物の影に姿を隠した。その動きは疾風の如く木剣の一閃は雷の如し。一人また一人、十数人いた男達も残りわずかとなつていった。その時、賊の一人が後ろからカイトに銃の照準を合わせた。カイトはその気配を察し振り向き、咄嗟に握っていた木剣を投げ放つた。木剣は銃を持つた男の手に的中。拍子に銃は暴発し、弾丸はカイトの頬をかすめ給油塔に当たった。次の瞬間、轟音とともに給油塔は爆破炎上した。

轟音とともに爆風は倉庫のシャッターを吹き飛ばし、ルーカとコルネを襲つた。ルーカは紙一重でシャッターから逃れ、コンクリートの柱に身を隠した。コルネは直撃をくらいシャッターごとコンク

リートの壁に激突した。さらに第一の爆風により倉庫にあつたバイクが倒れ、燃料が漏れ始めた。

（ま、まざい。）のままだと燃料に引火して建物ごと吹き飛んじまう。）

ルーカはその場から離れようとしたが、その目に意識を失つたコルネが飛び込んだ。ルーカは立ち止まり出口に向けた足はコルネの方に向けた。

（戸惑つている時間はない。）

ルーカは吹き飛ばされたシャッターを払いのけてコルネを引っ張り出した。

（ドグオノー）

間一髪ルーカはコルネを助け出し倉庫からの脱出に成功した。

あつと言つ間にその炎は村を紅蓮に染めた。盗賊団は自分達の置かれている状況に戸惑い始め、カイトにかまわずそれぞれの家庭へと急いだ。

「助けないと、でも、このまま焼き尽くしてしまえば悪は滅ぶ。それで全ては解決する。でも、それが正義なのか、いや違う。でも、（殺せ、悪は全て殺せ、お前は正しいんだ。正義なんだ。）

その時、何者かがカイトの心に囁いた。

「な、なんだ、また、また、誰かが僕に語りかける。」

（殺せ、全て殺せ）

「ぐわあーっ、やめろ、やめてくれえー」

カイトは突然頭をかかえ叫び、狂い、倒れ、のた打ち回った。やがて、叫びは消え呼吸も元に戻り始め、さつきまでとは違つた感じのカイトが立ち上がった。金色の髪は逆立ち、目の色は澄んだブルーから血走つた紅に変わつた。なによりも、先ほどまでの鬪気は凍り付くような殺氣へ変わつていた。その姿はまるで悪魔でも憑依したかのようだつた。ゆっくりと木剣を拾つたカイトは家族の元に急ぐため背中を見せた盗賊団の者に躊躇することもなく襲い掛かつた。異様な叫び声が辺りに響き渡り、炎に包まれて行く村の中で目撃者

無き殺人は繰り替えされた。そのうちに、コルネを引き摺りながらルーカがカイトのいる場所に近づきその光景を目にした。

狂喜乱舞したカイトは男達を薙ぎ倒した後、女、子供関係なく、まるで狩りでもしているかのように笑みを浮かべながら血に染まつた木剣を振るい続けた。血が流れ落ちる木剣、その近くに倒れている女性や子供、ルーカの背中で意識を取り戻したコルネの目に悲惨な現実が映し出される。

「カ、カレッタ、デウギー、…」

ルーカの背中から、手を伸ばし仲間の、そして村人達の名を呼ぶコルネ。コルネはルーカの背中から腕を外し仲間の元へと足を引き摺りながら近づいて行つた。一、三歩、歩いたところで体制を崩し倒れ込んだ。体の至る所に傷をおい動かすことも困難でありながらも、コルネは最後の力を振り絞つて仲間の所にはつて向かつていた。仲間の所まであと1mほどになつた時、コルネの前にカイトが立ちはだかつた。血しぶきがついたその顔、弱い者を卑下するような瞳、その姿がコルネには許せなかつた。

「貴様が、貴様がやつたのか。そうか、お前が（金髪の狼）、」「コルネはカイトのズボンの裾を掴み這い上がつて行つた。ズボンから黒いロングコートに手がかかりその手はカイトの胸座まで達した。「なぜ、なぜだ。ここまですることはなかつたはずだ。答える。」「コルネはカイトを見上げ荒い口調で問いただす。カイトは冷めた眼差しでコルネを見下ろし右手をゆっくりと上げた。

「カイト、よせ。」

ルーカはカイト行動に慌てて走り出しが、カイトは木剣を胸の位置まであげ、その位置からコルネの顔をめがけ振り抜いた。木剣の柄がコルネの頬を歪ませ、横倒しになつた。コルネは最後まで仲間を気遣うように腕を伸ばしながら意識を失つた。

「このコート、けつこう気にいつていたのに」「カイトはコートについた汚れを左手で払い、倒れているコルネを見た。ルーカは俯き歯を食いしばつっていた。

燃え盛る炎は村全体を飲み込もうとしていた。

(キュウ)

カイトの革手袋が鳴り右手に力がはいった。

「よかつたですね。気を失つたまま死ねるなんて、」

血を吸つた木剣がカイトの頭上からコルネへと振り下ろされた。

(ガキーン)

ルーカはコルネの前に滑り込み68式ガンファーでカイトの木剣を受け止め、コルネをこの一撃から守つた。

「何のつもりだいルーカ。」

「カイト、お前はこいつを殺す気なのか。」

「そうですよ、それがいけませんか。」

「そう言ったカイトの眼はあきらかに狂つっていた。ルーカはコルネを担ぎカイトからゆつくりと離れて行く。

「ルーカ、何をしているのですか。もしかして、そいつを助ける気じゃないだろうね。そいつは盗賊なんですよ。彼を助けると言つことは、」

カイトはその短い木剣を両手持ちに切り替え、左脇腹付近まで引き付け体制を低くし突きの構えをとつた。ルーカは背中に凄まじい殺氣を感じた。次の瞬間ルーカの背後から電光のような木剣突きが襲う。ルーカはその一撃を交わすためにコルネを投げ捨て、ルーカ自身も横に飛び難を逃れた。

「カイト、なに狂つてるんだ。」

「狂つてなんかいませんよ。悪党には死を。そして、あなたもね。保安隊規第13条・公務執行の妨げになる者は実力を持つて対処すべし。・・・生死を問わずに・・・ね。」

カイトは不気味な笑みを浮かべ、ルーカに向かつて木剣を伸ばした。今、周りを炎で囲まれた村の中央広場で避けることのできない宿命の闘いが始まろうとしていた。

ルーカは68式ガンファー右腕に沿わせるようにし後屈立ち上段受けの構えで身を沈めた。右腕は顔の前面に構えカイトの攻撃に備

え、左腕は拳を握りいつでも攻撃できるようにした。二人は周囲を炎が取り巻く中、静かに距離をおいて構えた。炎は風を呼び中央広場に砂煙を巻き上げた。ルーカは受け身の体制から突進に変更。一気にカイトの懷に潜り込むと正拳突きをみずおちにねじりこんだ。しかし、カイトはその一撃をなんなく交わした。ルーカは即座にガンファーを内腕から回すようにして連續攻撃を仕掛けるが、どの攻撃も紙一重でかわされた。正拳突き掌底に手刀、ルーカの攻撃はごとごとくかわされ、しだいに焦りを感じた。やがて、カイトはバックステップでルーカとの間合いをとり、薄ら笑いを浮かべた。今までの構えとき、新たに木剣を鳥居のようにして上からルーカの方にゅっくりと、息を吐きながら降ろしていった。（朱雀の構え）

「どう言つこと、な、」

ルーカは途中で言葉を失つた。カイトの体が透き通るように消えた。次の瞬間、ルーカの後ろに冷たい風が通りぬけカイトが姿を現し、木剣をその構えのまま薙ぎ払つた。ルーカは本能的に体を前に倒しその一振をかわした。

「よく交わしましたね。はつきり言つて驚きました。でも、次はどうでしようね。」

カイトは再度、先ほどの構えをとり、姿を消した。ルーカはその動きを捉えようとするが、カイトが攻撃に転ずるその一瞬しか捉えられずについた。

一度、二度、その攻撃がスピードを増していくたびにルーカは打撃を受けていった。

「ふつ、急所は外しているようですが、いつまで続きますかね。」カイトはまた、透き通るような残像を残し、姿を消した。しかし、ルーカは灼熱の炎の中、ついに目でその素早い動きを微かに捕らえた。そして、その動きを先読みし、体を反転させると同時にガンファーを左薙払いさせた。

（ボグウッ）

「ぐつ、」

一撃はみごとにカイトの左脇腹に入いった。

カイトは脇腹を押さえ、顔を歪ませながらバックステップで間合いをとりなおそそうと後ろへ飛ぶが、その動きはあきらかに先ほどまでの鋭さはうかがえなかつた。

（どうゆうことだ、俺の動きに…ま、まさか、俺の動きが見えたのか。いやそんなはずがない、単なる偶然に違いない。）

カイトは動搖しながらも次の攻撃をとるためにじわじわと間合いを詰めて來た。

町の外では、ポロンにカイトからの伝言を聞いた保安隊がようやく到着した。

「ルーカとカイトはもう脱出したの、」

ポロンは心配そうに尋ねた。

「まだ、外に出たと言う報告は受けていません。たぶん、まだ、」保安隊員の一人がポロンと視線を合わせず、言葉を濁した。ポロンの顔から血の気が引いていく。周囲に炎の熱が伝わってきた。消防隊の姿は無く、保安隊は炎に飲み込まれていく町を、ただ指を咥え見ているだけだつた。

「私、行く、」

「あつ、君つ、今行くのは危険だ。」

ポロンは保安隊の制止を振り切り、一人、町の中へと入つていった。（ルーカ、カイト。何してゐるの早く逃げないと、）

燃え盛る炎をかいくぐり、この場所にポロンが一人を捜し走つてきた。そして、二人を見つけた。

「まずいですね、こんな所見られたからには生かしてはおけません。それにはあなたが來ていると言う事は保安隊のやつらも、ルーカとともに新しい世界へと旅立つてもらいます。」

「えつ、」

カイトはすばやくポロンに切つ先を向け飛び込んだ。ポロンの瞳からカイトが消えた。そして、次の瞬間、ポロンの眼前には、木剣を振り上げたカイトの姿があつた。

「ルー・カ、次は君ですよ。」

カイトはルー・カの方にちらりと視線を向け呟いた。そこには自然体のまま突っ立っているルー・カの姿がうかがえた。ポロンは突然倒れ込んだ。

「きやあーつ、」

ポロンの叫びが辺りに木靈した。カイトはポロンの叫びにもためらうことなく木剣を振り下ろした。

（ガキイーン）

「なんだ、そ、そんな、」

「ルー・カ、」

カイトは自分の目を疑つた。ポロンの前に先ほどまで自然体で立っていたルー・カが、木剣をガンファーでうけている光景だつた。カイトは力を入れ、片膝をつけ受け止めているルー・カを押し倒そうとした。しかし、うつむき片手で受けているルー・カはびくともしなかつた。それどころか、その不利な状態から木剣を押し払い、立ち上がつてきただ。

「ど、どうゆうことだ。はつ、」

カイトはルー・カに話している途中、本能的に危険を察知し、ルー・カとの距離を取るため、後方に回転しながら飛んだ。着地したカイトはルー・カに目を向けた。しかし、そこにはルー・カの姿はなかつた。

「ど、どこだ、やつは、」

カイトはルー・カの姿を捜し辺りを見回した。その時、カイトの下腹部にルー・カのガンファーでの強烈な一撃がはいつた。

「ば、馬鹿な、そんなことが。このおー、」

カイトの口から一筋の血が垂れた。ルー・カの打撃に絶えられず、膝が震えていた。が、木剣を横一閃に振り、ルー・カに追撃を出させなかつた。

「お前は、ただの血に飢えた野獣だ。」

ルー・カはガンファーの先端をカイトに向け、比喩の言葉を叩き付けた。

「野獸ですか、良い表現ですね。忌々しい、」

カイトは冷静さを失い、牙をむき出しにした狼と化し、ルークに襲い掛かった。ルークは後の後をとり、カイトの木剣を受け流し、横腹に重い一撃を叩き込んだ。ルークからの一撃を食らいながらも、懐に入つてきているルークに対して、すばやく左手に持ち替えた木剣を突き刺そうとした。ルークは低い体制から後ろへ飛び、その攻撃を交わした。

「はつ、」

攻撃をかわしたルークは止まることなく、バックステップから即座に突進した。

「なめるなつ、」

カイトもこの攻撃を予測し、木剣を逆手に持ち替えルークの首を薙ぎ払いにいった。

「もうつ、えつ、」

カイトのとらえたと思つたその一撃は空を切り、その勢いで前かがみのように、状態が崩れた。そこへ、上空からカイトの左肩にガンファーを打ち込んだ。

「うつ、」

カイトは左肩を落としながらも必死に堪えようとした。

「お前の負けだ。カイト、」

それでも、なお、動こうとするカイトに力強く言い放つた。カイトの体から力が、そして、殺氣が消えた。目が澄んだブルーに戻り、逆立つた髪も元に戻つていった。その顔から憎しみは消え天使のような微笑みが残つた。

「これで終れる。やつと開放される。」

「いや、違う。これから始まるんだ。」

カイトは膝を折りゆつくりと倒れた。ルークは力尽きるカイトを支え、そう答えた。二人の間に言葉では言い尽くせない会話が交わされた。そして、二人の死闘に終止符が打たれた。

それから数分後、保安隊が消防隊を引き連れ突入を開始した。口

ルネ盜賊団並びにその家族は彼らの消火活動により無事、保護された。ルークはカイトを肩に担ぎポロンを連れ保安隊のまつ場所へと向かつた。カイトは意識を取り戻したものの何一つ語らず、すぐさまレトンの病院へと連れて行かれた。長かつた一日が終わりを告げた。

あの、忌まわしい事件が終わり、数日が過ぎ去つていった。町はお祭り騒ぎ、数日後には町をあげての式典まで催される事になった。無論、カイトを始め保安隊はもちろんの事、功労者であるルーク、ポロンも招待された。全身包帯だらけのカイトは誰とも口を利かず、一日中外を見つめていた。コルネ盜賊団逮捕の知らせはこのプロック以外にも広まり、レトンの町はにぎやかさを取り戻していった。

「金髪の狼」がカイトだった事など知らず・・・

ルークとポロンはコルネ盜賊団逮捕の功労者として賞金が送られる事になつていた。カイトにおいては功績が認められ一階級の特進が告げられる事になつていた。そして、その日が幕を開けようとしていた。

朝日がまだ昇つていない薄暗い町のメインロード、包帯だらけのカイトが馬を連れ町の外へと向かつっていた。

「何処に行く気だ。カイト。」

夜が明ける前の静かな町にルークの声が響いた。カイトはラナウェイの手綱を持つたまま振り向いた。そこには、旅支度を済ませたルークとポロンが建物の壁にもたれ立つていた。

「悪いことをしましたね。いくら謝ったところで許してもらえるとは思つていません。」

「それで、出て行くのかこの町から。何も言わずに、」

「はい、」

カイトはそう一言だけ呟いた。

「正義感の強いお前がどうして、」

「その正義感が時として重圧となり僕にのしかかる。やがて、その重圧に耐えられなくなつた時、もう一人の自分が現れる。それが、」

「それが、金髪の狼なんだな。」

カイトは田を背けるようにして一人に頭を下げた。ルーカは荷物をその場に置き拳を握り締めカイトに向かって歩きはじめた。ポロンはルーカの握りしめられた拳を見て、そのあとに少し下がつてついて行った。ルーカがカイトの前まで来ると、その拳をカイトの腹に叩き込んだ。ポロンはその行動にカイトの側に行こうとするが、ルーカは腕を横にしてポロンをそれより先に行かせないようした。

「うっ、」

カイトは手綱を持っている反対の手で口を押さえ、その場に膝まずき地面と見詰め合い嘔吐した。その中、一粒の涙が零れ落ちるのをポロンはそつと見守る事しかできなかつた。

「本当にそれでいいのか。それで全てが片付くとでも思つてているのか。答える、カイト。」

「それが得策。そ、それしか思いつかないんですよ。」

ルーカは跪いているカイトを見下ろしながら問いただした。カイトは口元を上着の袖で拭きながら静かにそして、寂しそうな声で答えた。ルーカはカイトの胸座に手を伸ばしカイトを立たせた。

「だつたら、俺が考えてやる。」

「よしてください、そんなに簡単な事じゃないんですよ。君にも解つている筈です。だから・・・」

「だからこのまま行かせるとでも言いたいのか。ふざけんじゃねえ。お前はなぜ生きているんだ。カイトがカイトであるために生きているんだ。だつたらカイトでいる。命尽きるまでカイトでいる。」

ルーカはカイトの胸座を引き寄せ田の前で怒鳴りつけた。やがて、ルーカはカイトの胸座から手を放し荷物をとりに戻つた。

ルーカとすれ違いにポロンがカイトの側に近づいて來た。そして、カイトにそつとハンカチを差し出し、にっこりと微笑んだ。しかし、カイトの表情は以前深刻なままだつた。

「同情はよしてください。そんな事をして被害を受けるのは貴方達なのですよ。」

カイトの言葉にルークの動きが止まった。

「被害、どんな被害を受けるつて言つんだ。そんなことはさせない。俺がお前のリミッターになつてやる。」

「でも、」

「でもじやねえよ、確かに今直ぐはむりだ。だけど、これから先も無理だつて決まつたわけじやないんだ。お前がどう言おうと、どう思おうと連れて行く。もう決めちまつたんだ。そのうちごどうにかなるさ。」

ルークは少し照れくさそうに言い、また動き始め、カウボーイハットを深く被つた。何時の間にか朝日が地平線のかなたから顔を見せ、三人を暖かく包み込んでいた。

「ああ言い出したら何言つても聞かないよ。でもね、ルークならどうにかしてくれる。きっと。行こう、ラナウェイ。」

ポロンはラナウェイの手綱を持つてルークの方へ歩き出した。ラナウェイは主人を元気づけるかのようにカイトの顔を舐めた。カイトの緊張はとけ、笑顔が浮かんだ。

「さあ行こう。」

ポロンはカイトの手を引きルークの待つ場所へと向かつた。まだ、町の人々が起きる前にルークとポロンの旅は新しくカイトを加え、次なる町へと向かうことになつた。

それからさらに数日が過ぎたある日、今回の事件判決が第28エリア裁判所でだされた。

判決内容・・・コルネに対しては、村を切り捨てたエリア議会の無責任な行動に対する謝罪やカイトの嘆願もあり死刑だけは免れたが、社会に大きな混乱を与えた事の罪は重いとされ独房禁固25年とされた。

他の者にも相応の刑期がくだされた。

「真実は決して一つではない。居住空間や生活環境でいくつにもなる。そのことをわすれないでくれ。」

コルネは全ての判決が下された後、傍聴席の人々に向かいこう言い

残し裁判所からエリア刑務所に連行されていった。

## 走り出した時間

### 走り出した時間

ルーカ、ポロン、そしてカイトの三人は、F・ハンターの仕事を請け負うために、レトンから北東へ300kmほど、ヒュールファー第一の都市カスターへと向かつた。途中、砂漠地帯を越えた所でカイトは愛馬ラナウェイを保安隊直営牧場に返した。

「今までご苦労だったね。この傷も私のために。後はゆっくりとここで余生を送るんだよ。」

カイトはラナウェイの十字傷をやさしくなでながらそっと呟いた。  
「さあ、行くんだ。後はお願ひします。」

カイトはラナウェイを仲間の元へと走らせ、牧場管理者にペコリと頭を下げ牧場に、そしてラナウェイに別れを告げた。さらに三人は縁無き岩山マステンド山を越え、ようやくカスターへと辿り着いた。

ヒュールファーの首都・カスター、28エリア唯一の飛行場があり、北の玄関口として栄えた、一番地区を中心に周囲10km人口五万人程の都市。

「ようやくついたわね。」

ポロンは町へつくなりしゃがみこんだ。

「早速、F・ハンター事務局を捜すとするか。」

疲れを見せないルーカは、F・ハンター事務局を捜し辺りを見渡し始めた。

「所でルーカ、君はどの階級のハンターですか。」

「・・・」

辺りを見渡すルーカにカイトはF・ハンター階級を尋ねるが、ルーカには何の事なのか分からず、目を大きくして無口になるだけだった。カイトは軽い笑みを見せ歩き出した。

「それじゃあ、私がF・ハンター階級について説明します。」

カイトは歩きながら一人にこの制度を説明はじめた。

## WFO 規約・第二章

猛獸対策捕獲官（通称F・ハンター）はWFO（世界猛獸対策機関）に属している。一年前から猛獸・珍獸、その全てを捕獲並びに保護、生態調査、駆除と仕事内容が拡大したために、D級と言うアマチュア階級が作られた。D級以外の全て登録制。階級は下からD・C・B・A・S、とランク分けされていて、D級は誰でも許可なく捕まえる事の出来る、いわばアマチュアハンター（アルバイター）。リスクも少ないですが報酬も期待は出来ない。C級は安全エリアと言われる危険度が低い地域を担当できるF・ハンターですが、アルバイターを雇つて仕事をする事は出来ません。B級は安全エリアの他に、不完全エリア（開発途上エリア）と言われる近代文明があまり発達していない危険区域を担当でき、B級以下のF・ハンターを雇つて仕事を行う事が出来る。A級は安全エリア・不完全エリアの他に、未開発エリアを担当でき、A級以下のF・ハンターを雇つて仕事を行う事が出来る。また、その権限は、10の主要エリア以外の警備隊並びに保安隊を指揮する事ができ、S級F・ハンターのアシスタントとして特殊任務に参加する事が出来る。S級は全てのエリアを担当でき、特殊任務以外の仕事を全てのランクのF・ハンターを雇つて行う事が出来る。その権限も特別で首都以外の軍をも動かす事が出来る。それだけに現在S級F・ハンターの数は全世界に5・6人しかいないと言われている。C・B・A・Sは免許が必要となっているが、免許と言つても一昔前の様に、特殊な訓練をつみ与えられる物ではなく、事務局で申請すれば誰でもこの資格を取得出来る。なぜなら仕事範囲の拡大、相次ぐ行方不明事件や死亡事件でF・ハンターが激減し、人手不足が大きな問題となつていていたからであった。最初はC級、ハンティングポイントが規定に達したときB級の受験資格がえられます。B級から先は、ハンティングポイント・功績・経験年数・などからWFOから各事務局へ通達され本人に昇格が知らされます。S級への昇格には政府の議会で厳密な審査

のうえ国民の同意をえた後に決まる。

カイトが説明を終える頃には、人も多く目に映る様になる。何度か保安隊会議でこの町を訪れた事のあるカイトは一人を引率し、F・ハンター事務局のあるコンクリート三階建ての建物の前で止まつた。事務局は三階建ての建物で、一階は事務局になつていて、裏手から捕獲した猛獣、珍獣などを運び入れるため高さ12m程の事務局兼一時的な捕獲所、二階と三階はF・ハンター専用宿舎となつていて、F・ハンターは格安で滞在できる事になつていて、三人はまず一階の事務局でF・ハンターの申請を行う事にした。木製の扉を開け中へと入つていくと受け付けがあり、一人の若い女性が座つていた。ブロンドヘアのワンレングス、彫りが深く美人。ネームプレートには（キヤス・ウェッシュ）と書かれていた。

「すみません、C級ハンターの申請をしたいのですがどうしたらいいですか。」

「そこにある書類に記入して持つてきてください。」

キヤスは、カイトからハンターの申請方法を聞かれると、手のひらを裏返しにし、手前のテーブルの書類に記入するよう薦めた。「ルーカ、こつちで書類に記入してください。それを受け付けに出し、受理されると申請は終わりです。」

「なんかめんどうくさいなー。そんな事するの。やめよっかなー。」カイトの説明でルーカは顔を渋くしながらテーブルの上に置かれた書類に目を通し、書き終えた。

「カイト、これでいい。」

「ええ、これでいいですよ。さあ、出しに行きましょう。」

記入を終えた二人はキヤスに書類を順序よく提出していった。

「カイトさん1542番です。ルーカさん1543番です。ポロンさん1544番です。」

キヤスはそれに申請仮ナンバーを配布していった。1542・

1543・そして、1544。

「えつ、」

1544・そして、ポロンの名を聞かされた時、一人は同時に声を発した。そこには紛れも無いポロンが受け付けで書類を手渡している姿があった。

「なお、申請には2日程かかります。どうぞそれまで、ここにの2・3階にある宿泊施設をご利用ください。」

キヤスは左方を指差しフロントを紹介した。そして、三枚の書類を持つて奥にいる事務局員と思われる男の所に歩いていった。

「よしどと、2日待てば私達、晴れてF・ハンターね。それまでシヨッピングでもして時間をつぶしましようよ。」

絶句する二人を目の前にして、受け付けを終えたポロンは、陽気な顔で二人に話しかけた。

「ポロンさん、あなたも、」

「あつ、私もハンターしようかなーと思つて。それより早く行こう。」

「カイトは慌てた表情でポロンに聞くが、ポロンは何食わぬ顔で荷物をまとめフロントへと向かつた。ポロンの後ろ姿を見て、ルーカの方を振り向いた。

「あいつも強情だから、一度いいだしたら聞かない。まつ、心配する程でもない俺達が付いている。」

「ええ、」

ルーカは明るい表情でポロンの後ろ姿を見ながら言つフロントへ向かつた。その言葉に一瞬暗い表情で黙り込んだカイトも、二つ返事でフロントへと一人の後を追いかつた。

フロントで一つのルームキーをもらいそれぞれの部屋へと入った三人は、荷物を置いた後町へと出る事にした。

さすがはヒュールファー主都、さまざまな武器や道具、日曜雑貨に食料その他、メインストリートぞいにある商店の軒下には数々の商品が並べられていた。ルーカやポロンの目には見なれない物が次々と飛び込んで来た。其のたびに、あっちにふらふら、こっちにふらふら、人通りの多いメインストリートを右往左往していた。カイ

トは、子供を引率する保護者のように一人の後をあわただしく追つていった。やがて、街灯に明かりが点りはじめると、ルーカとポロンは立ち止まり顔を見合わせた。

「カイト、腹減った。なんか食べに行こうよ。」

「わたしもお腹が減った。」

ルーカとポロンは腹を抱えカイトに提案した。二人に振り回され歩きつかれたカイトはそれに合意、一件の古いレストランに入る事にした。

レストランと言つても大衆食堂を思い出させるその店の中は、いっぱいの人で席が埋まっていた。すぐに席は空き三人は食事を済ませた。食事を終えた三人は、街灯の点る夜の町をF・ハンター事務局に戻ることにした。レストランからF・ハンター事務局までは2ブロック先を右に曲がつてまつすぐに行くだけだった。ポロンとカイトはおしゃべりに夢中になり、ルーカの事など忘れて事務局の前まで戻ってきた。

「ところでルーカ、やけに静かですね。」

「お腹いっぱい食べたしねむくなりましたか。」

カイトとポロンは事務局の前で振り向き話しかけるが、そこには街灯に照らされたストリートが映し出されるだけで誰もいなかつた。

「まあそんなに離れた距離じゃないし大丈夫ですよ。」

カイトは扉のノブに手を伸ばしながら心配そうにストリートの方を見ているポロンに声をかけた。

「か、帰つてこれないかも。ルーカ方向音痴なの。」「えつ、」

「えつ、」

ポロンの言葉に、ノブにかけた手を慌てて放し薄暗い町を見渡した。

「そうだったのですか、とりあえずポロンさんは部屋に戻つてください。女性は少し危険です。私がルーカを捜してきます。」「で、でも、」

「大丈夫、任せて。」

カイトはポロンに部屋で待つてもらう事にし、一人夜の町にルーカ

を捜しに行く事にした。ポロンは心配そうに事務局の扉を開け、中に入つていった。

カスター南部三番地区、賑わいを見せる十番地区とは裏腹に、人通りは少なく昼夜を問わず、悲鳴と爆音が鳴り響いている犯罪多発地帯、その地区にルーカは足を踏み入れていた。建物のガラスはことごとく割られ、街灯はまばらにしか点つておらず、薄暗い路面のあちらこちらに浮浪者らしき人たちが建物に寄りかかって歩道を占領していた。

「事務局は確かこっちだと思つたんだけど。」

ルーカは薄暗いストリートを闇雲に歩き回っていた。歩けば歩くほど事務局のある三番地区から遠ざかっていることも知らずに。

三番地区・・・カイトは急いでもと来た道をレストランへ向かい走る。レストランに着いたカイトは、パンを少しもらい辺りの人から情報をえてルーカの足取りを追つた。三番地区から南へ、グリーン地区と呼ばれている公園街の七番地区を通り過ぎ、十番地区にたどり着くまで、元保安隊密偵部隊にいたカイトにとつてそれほど時間はかからなかつた。

「ありがとう、これを取つといて、」

カイトは十番地区につくと浮浪者達にルーカの特徴を話しパンを渡した。なぜなら彼らは、この十番地区の住民として、ちょっとした変化でも敏感に反応し、住処を変えていかなければこの地区で生きていけないからだ。それと、この地区ではお金より食料が優先されるからであった。

「よー、あんた見ない顔だな。新入りかい。」

「いや、人を捜しに来ただけです。」

「じゃあ、一つ忠告してあげるよ。最近ナイトスネーカつて新参チームが、この地区をしきつてているハーデスとの抗争が後を絶たない。気をつけな。」

浮浪者の男は帽子を深く被り小さな声で、カイトにこの町の情報を土産として持たせた。

十番地区・・・そのうちルークは煉瓦風建物が両脇を塞ぐ路地へと入り込んだ。その路地は二人ほどの人がすれ違うのがやつとと言つた幅で街灯は点いていない。

「おい、ここを通りたきやー、有り金全部おいていきな。」

「ないなら、命でもかまわないぜ。」

その声は、路地の奥の方から聞こえてきた。ルークは薄暗い路地の奥、目を凝らして見ると二人の青年が立つていてるのに気付く。上下とも少し大きめの黒い皮の衣装に身を包み、サングラスを掛けている。顔には靴墨でも塗っているのだろう、どの部族の黒人にも似ておらず、時より見せる白い歯が闇夜に浮かび上がり不気味さを感じさせていた。

「お金もつてないし、じゃー戻るよ。あれ、」

ルークはこのルートを諦めようと振り向き戻ろうとしたが、そこにいる男達は、先ほどの男達と同様の格好をして道を塞ぎ行く手を阻んでいた。ルークは狭く薄暗い路地で行く事も戻る事も出来ずにただ、その場に立ち尽くだけだった。

「さあーどうする。」

「ここじゃー失踪事件は珍しくないんだ。」

「俺達も悪魔じゃねえ。金目のもんでも大目に見てやるよ。服脱いでさつさと見えな。」

男達はルークに顔を近づけ脅し始めた。ルークには何がなんだか分からず後退した。まさに四面楚歌。

「ふうーようやく見つけました。心配しましたよ。」

大通りの方から聞きなれた声が聞こえ、男達は一斉に声の方に目を向けた。

「あつ、お前がいるつて事は、やつぱり方向はまちがつちやーいなかつたつて事だな。」

自分の方向感覚に自信を持ち、誇り高ぶるルーク。その自信に満ちた話し方に、頭を抱え絶句するカイト。男達は一人の訳のわからないやり取りに苛立ちを覚え始めた。

「はあー、この少年は私の知り合いです。粗相があつたのなら彼に変わつて謝罪いたします。」

カイトは男達に囲まれたルーカの元へとさつそつと近づいていった。そして、手前の男達をかき分け中心へと入つて行つた。男達はその堂々とした態度に度肝を抜かれ、一瞬言葉を失つた。

「くつくつくつ、こいつは驚いた。世の中まだこんな馬鹿がいたのかよ。」

「それとも俺達をなめているのか。」

男達はルーカとカイトを睨めつけた。皮パンツのポケットからだした手にはメリケンサックが握られていた。

「今日はとても月が綺麗ですよ。でも、ここからでは良く見えませんね。」

「へつ、」

「着いて来てください。」

カイトはルーカにやさしく話し掛けた。ルーカはこの状況に置かれていってもまったく分かっていなかつた。

「なに、わけわからんねえ事、言つているんだ。」

「お前達はここで永遠の眠りにつくんだよ。」

男達はメリケンサックをはめた手でルーカとカイトに襲い掛かってきた。

「いきますよ。」

カイトが強い口調でルーカに言つた後、右の壁に向かい飛んだ。右の壁を蹴り、左の壁へ、左の壁を蹴り、右の壁へ、ジグザグに上へと向かつた。たちまちカイトは、10数メートルある建物の屋上へと上り詰めた。男達はその人間離れした行動に絶句した。

「す、すげえー、俺もやってみよつと。」

ルーカは無邪気にそう言つと、カイトがやって見せた事と同じ事を、試みようとした。

「はつ、てめえは逃がさねえ。」

男達の一人がルーカの行動に気づき殴り掛かってきた。

「これでおしまいだ。」

男の拳がルークを捉えたかに思えたが、カイトは動じる事無く、屋上で腕を組みルークの行動を無言でうかがっていた。ルークは残像だけを残しカイトがやつて見せた壁登りをやり遂げた。

「な、何だったんだ。俺は今確かにやつの後頭部へ打ち込んだはずなのに、」

男はあまりに瞬時のこと、何が起きたのか分かつていなかつた。しかし、カイトには見えていた。ルークの精神は研ぎ澄まされ、周りの者の動きがスローモーションに見え、男の拳が届く前にスタートを切つっていたのだ。そのスピードはあまりに速く残像を残す結果となつた。

「す、凄いですよ。君は、」

「はは、出来ちゃつた。」

カイトはルークの行動に身震いを起こすが、当の本人は無邪気に喜ぶだけで、凄い事をやつたと言つ自覚はなかつた。

「やろー、俺達も続くぞ。」

「まずは俺からだ。」

下では男達が、カイトやルークのまねをしているが、無理であつた。「さあ、戻りましょう。長居は無用です。それにポロンさんが君の帰りを待つています。」

「あいつらは、」

ルークは下を覗き込んだ。

「ほつときましょ。」

カイトは、腰を降ろし下の男達を見ているルークにそつと呟いた。ルークは立ち上がりカイトとこの場から離れる事にした。二人はきれいな星空の元、建物の屋上と屋上とを飛び渡り、十番地区から離れる事に成功した。

「あいつら、おもしろい連中だな。またこよつか。」

「だめです。」

事情が未だ飲み込めないルークは帰路の途中、笑顔で呟いた。カイ

トは呆れながらも強い口調でルー・カの意見を却下した。十番地区をぬけた二人は、建物の屋上から地上へと飛び降り、急いでポロンの待つF・ハンター事務局へと急いだ。

そのころ十番地区中央広場（別名＝処罰の受け皿）には、十数台のバイクが轟音を鳴り響かせ中央にヘットライトを向けていた。ヘットライトの中心には街灯があり、4人の男がそこに縛られていた。「ま、待ってくれ。奴等並みのやつじゃねえ。壁を上つていつたんだ。な、た、頼む、今回だけは見逃してくれ。」

四人の男達は周りを囲んでいる武装集団に声を震わせ許しを請う。「ジャ、ジャッカルさん。あんたならみんなを説得できる。た、頼むよ。へへへ・・・」

そこへ皮ジャン姿にサングラスを掛けた180cmほどの痩せた黒人が、四人の前に現れた。男達は、ジャッカルと呼ばれる男に引きつった作り笑顔で頼む。ジャッカルは沈黙のまま高々と右腕を上げ、そして振り下ろされた。

「やりなさい。」

しゃがれた声が四人に処刑を宣告した。20人ほどの武装した男達はジャッカルの合図でバイクから降り中央へと向かった。

「ま、待ってくれ、必ず、必ず始末はつける。だ、だから、」  
(ウギヤーアー)

男の必死な頼みも聞き入れられずジャッカルは背を向け武装した男達とすれ違つて行く。そしてまもなく、十番地区に悲痛な叫びが木霊した。暴行を受けているのはまぎれもなくルー・カとカイトに襲い掛かってきた4人であった。

「リー、」

ジャッカルは一人の男を呼び付けた。中央広場から少し離れた所に、建物に背をもたれ立つていた男がジャッカルの方へと歩み寄つて來た。その男の肌は黄色、長い黒髪に切れ長の鋭い目、背丈は170cmほど、細身で皮ジャンにジーンズ姿であった。

「連れて来なさい。すぐに。」

「分かりました。」

ジャッカルは低い声でリーに命令を下す。リーは数人の部下を連れ、広場から離れ暗闇の中へ姿を消した。

「くつ、くつくつ、いい月夜だ。」

ジャッカルは一人、空を眺め不気味な笑い声を発した。

事務局に戻ったルーカとカイトは、足早に自分達の部屋へと向かう。廊下には人影は無く、一人の足音だけが聞こえていた。やがて、足音はポロンのいる部屋の隣で止まった。

（ガタン）

「カイト、どうだつた。」

聞き耳を立てていたのだろう、足音に気付いたポロンが、部屋の扉を勢いよく開け廊下へと飛び出してきた。

「よおつ、」

「よおつ、じゃないわよ。方向音痴。」

ルーカはポロンの顔を見ると手を軽く上げ軽い声で言つた。ポロンは鬼のような表情でルーカの方へ駆け寄り大声で叱り付けた。

「まあ、まあ、見つかつた、と言う事で、」

「そうだ、そうだ。」

ポロンとルーカの間に入るようカイトが口を挟んだ。一瞬はカイトの言葉で顔をゆるめたポロンだが、ルーカの余計な一言で顔の表情が豹変した。

「そうだじやないでしょ。私にどれだけ心配かければいいの。」

「そんなこといつてもお前が付いてきたんだろ。」

「だいたいねえ、私がついていなけりやレトンにも辿り着いてないわよ。」

（た、確かに、）

二人の問答に、多少呆れながら聞くカイトだが、ポロンの言つてている事がもつとだと思った。一人の口喧嘩はどどまる事無く続き、次第に宿泊客も面白がつて三人の周りを取り囲んでいった。

「あつ、お騒がせしています。すぐに部屋へ戻りますから。」

「おもしれえからもうちつとやらせとけよ、兄ちゃん。」

カイトは、宿泊客に頭を下げ誤った。そうしている間に、周囲の笑い声でようやく気付いたポロンとルーカは顔を真っ赤にして部屋へと戻つて行つた。

「なんだ、もう終わりか、」

「面白かったよ。」

二人が部屋へ戻ると周囲を囮んでいた宿泊客も自室へと戻つていき、カイト、一人廊下へ残された。

「はあー」

ようやく一悶着が終わり、部屋に入れたカイトはため息をついた。それもつかの間、室内ではルーカとポロンが廊下での続きを始めていた。カイトは、二人の痴話喧嘩に口を挟む事無く、汗で汚れた体を、自室のシャワーで洗い流した。カイトがバスローブに身を包み、シャワールームから帰つて来るころには、一人仲良くベッドに腰掛け笑つていた。

「あつ、カイト、シャワー浴びていたんだ。俺も、使おつと。」

「それじゃあ、私も部屋に帰つてシャワーでも浴びて寝よう。」

ルーカの言葉に、ポロンはすつきりしたような顔で扉へと向い歩き始めた。ルーカは、出入口のある扉とは反対にあるシャワールームへと向かつた。

「あつ、カイトありがとう。」

ルーカがシャワールームに入つたころ、ポロンはその歩みを止め振り向き、カイトにそつと微笑んだ。カイトはその微笑みに、濡れた髪を拭きながら、笑みで返した。

（キイー、バタン）

静かに扉は閉じた。

ルーカはシャワーを浴び、タオル一枚でベッドに倒れ込んだ。

「はい、ルーカ」

「おつと、サンキュー」

カイトはすでに服を着込み、備え付けの冷蔵庫からジュースを一本

取り出すと、その一本をルーカに投げ渡した。

「ブツファー、」

ルーカは缶ジュースを一気に飲み干し、満足そうな笑みを浮かべる。カイトは心配そうな顔で窓の外に浮かんでいる満月を眺めていた。

「どうしたんだ、カイト。」

「彼等が、このまま、いや、何でもないですよ。」

カイトは途中まで言いかけた言葉を飲み込み、カーテンを閉めた。隣の部屋では、明日のスケジュールを必死に考え込みシャワーを浴びているポロンの姿があった。シャワーの水圧はかなり強く、水飛沫をあげている。シャワーの水はポロンの体を伝い、排水溝へと流れ込んで行く。その時、ポロンの足元に黒い影が忍び寄っていた。

「きやあー。」

ポロンはおもむろに下を見つめ悲鳴をあげた。その声は隣の部屋にいたルーカやカイトの元まで届いた。

「ポロン、」

「ポロンさん、」

悲鳴を聞いた二人は、急いでポロンの部屋へ走った。

「やはり、一筋縄では行かなかつたようです。」

カイトは一人呟いた。部屋の前まで来るとカイトは扉をノックしたが、その呼びかけにも反応は無かつた。

「どけ、カイト、」

「ま、まつてください。まだ、」

カイトの話が済む前に、ルーカは持ってきた6.8式ガンファーを逆手持ちにより脇で構え、体制を低くし、一足飛びで扉に突き込んだ。その衝撃で、頑丈な扉ははがれ飛び、ルーカはポロンの部屋へと飛び込んだ。カイトもその後を追い中へと入つていった。

「大丈夫か、ポロン。」

ルーカは部屋を見渡す。荒らされたような形跡はなく窓も開いていなかった。

（シャー）

シャワーの音に気付いたカイトは、ルーカに無言で合図を送った。ルーカは無言で頷きシャワールームの扉の前に忍び寄り、ノブに手を掛けカイトの合図を待つた。

（ガチャツ）

「ポロン無事か、」  
「ポロンさん、」

カイトの合図とともに、ノブを回し中へと踏み込んだ一人は、言葉途中で絶句した。そこには全裸でしゃがみ、体長50cm程の紐ムカデをシャワーの水圧で流しているポロンの姿があつた。

「・・・きやー。」

時間が止まり、やがて、ポロンの悲鳴と同時に時間が動きだした。二人は慌ててシャワールームの扉を閉め、心を落ち着かせた。

しばらくして、ポロンが目を吊り上げシャワールームから出てきた。

「わ、わるい、悲鳴が聞こえたもんで、」

「す、すみません。ポロンさん。あ、あの、」

二人はバスローブに身を包み出てきたポロンに作り笑いで謝罪する。「ど・い・て」

言葉少なく、ポロンはきつい口調で一人に告げた。一人は慌てて両端によつて身をすぼめた。一人は必死にシャワールームの前で弁解をするがポロンからの応答は無かつた。

「あなのー、」

「分かつたけど、扉じうするのよー。」

ルーカは、振り向きポロンの方を見るが、ポロンは扉の方を見て小さな声で答える。

騒ぎを聞きつけ、フロントからキヤスが走ってきた。

「お客様、どうなさいまし・・・はあー。」

キヤスは部屋の前まで来ると、壊れた扉を見て呆れ返った。ルーカは事の次第をキヤスに説明した。その後こっぴどく叱られたルーカとカイトはそそくさと自分の部屋に戻ろうとした。

「ルー・カさん、カイトさん、この部屋は、扉がつくまで使用不能です。お連れのポロンさんと同室願いますよ。」

「えーっ。」

「えーっじや ありません。分かりますよね。今の状況、」

「はい、」

引きつった顔のキヤスは怒りで声を震わせながら言った。キヤスの強制的な指示に異議を申し立てる事無く一人はポロンの方を見た。「それから、こここの弁償は仕事の報酬から自動的にこちらに振り込まれるようにしますよ。」

「お姉さんまけてよ。」

「お姉さんじや ありません。キヤス、キヤス・ウェッシュュです。」 フロントに向かおうとしたキヤスは、冷たい笑顔で振り向き三人にそう告げた。

「そう呼んだらまけてくれる。」

「駄目っ」

キヤスは二人の言葉で冷たい笑顔は、鬼のよつな形相になり、宣告した。そして、頭を抱えながらフロントへと重い足取りで向かって行つた。

「そういう事で今夜はよろしくね。」

部屋の前で、扉の残骸を静かに見詰める一人の間を、荷物を持ったポロンが歩いて行つた。ポロンの後を、一人は黙つて残された部屋へと戻つた。

ポロンは部屋に入るルーカの荷物をベッドから投げ下ろし、自分の荷物を置いた。

「ポロン、お前なー、確かに俺達が悪かつたが、そこまでする事ないと思うぜ。」

「本当にそう思つ。」

「・・・」

ポロンの行動に反発するルー・カだつたが、ポロンの落ち着き払つた言葉に返す言葉は見つからなかつた。それどころか、先ほどの全裸

姿が脳裏を鮮明に駆け巡つていった。

「ははははつ「冗談だよ。当然だよな。うん当然だ。カイトもそう思うよな。」

「そ、そうですよね。当然です。はい」

ルーカは作り笑いで、この雰囲気に飲み込まれまいと必死に言葉を繕い、カイトへと投げかける。カイトも慌てながらも取り繕つた。そのころ、10番地区北部に本拠地を置く、ナイトスネークのメンバーは、溜まり場であるナイトメア（酒場）の個室で幹部会が開かれていた。薄暗いその部屋は煙草の煙が立ち込め、七人の男達が座っている。本来天井に備え付けられている筈の電球はテーブルの側まで降ろされ、男達の下半身しか照らされていない。仲間の表情が伺えない分不気味であつた。そんな中、出入口の扉から一番離れた奥の席に、異様な雰囲気を漂わせる男がテーブルに足を投げ出し座つていた。

「ジャッカルさん、ハーデスの奴等に不穏な動きが見られます。」

「クオーツ（闇商人）との取引も確認されています。」

「どうしますか。」

無論、ルーカやカイトの件も話題にはなるが、そのための幹部会ではなかつた。

「慌てないでください。こつちもただ黙つて監視していたわけじゃない。そうでしょう。」

ジャッカルの低いしゃがれ声に周囲の幹部は息を呑んだ。

「これだけの情報が出てきているつて事は、今夜当りが怪しいですね。誰か、リーを連れ戻してください。」

ジャッカルの命令で、一人の幹部が立ち上がり部屋を出ていった。

「残りは、祭りの準備です。」

「祭りだ。」

ジャッカルはニヤリと笑い呟くように言った。その言葉に幹部達は奮起し、席を立ちそれぞれの準備に取り掛かった。部屋の外では幹部達にこれから事を聞いた部下達が興奮を抑え切れず歓声を張り

上げていた。

「今夜が最後。」

一人部屋に残つたジャッカルは薄笑いを浮かべ、テーブルにおかれたバーボンを口に運んだ。長い夜は今、始まりの鐘を鳴らした。

十番地区で祭りが始まろうとしている頃、ルーカとカイトは物静かな宿舎の部屋、ソファーの側で寝息を殺し見詰め合つていた。

「ルーカ、息が詰まりそうです。」

業を煮やしたカイトは重い空気が漂う中、ベッドで横になつているポロンに気付かれない程の小声でルーカに尋ねた。

「んうー、」

ルーカは腕を組み考えるが、容易に答えは出なかつた。こちらに背を向け奥のベッドで横になつているポロンを前に、一人は静かに考えていた。

「そうだ。」

「何か、いい作戦が浮かんだのですね。」

ルーカのひらめきに、カイトは身を寄せ期待した。

「ああ、」

ルーカの自信に満ちた顔つきはカイトにとつて神の様に思えた。

「それで、」

「謝る。」

「えつ、」

「平に謝る。ただそれだけ。」

期待を寄せるカイトであつたが、ルーカの答えに啞然とした。しかし、それ以上の得策が見つかるはずもなく、ルーカの案に賛成するしかなかつた。

「うん、」

二人は顔を見合させ額き、部屋の明かりを点した。そしてポロンの側に歩み寄つた。

「ポロン・・・さつきは・・・つーん悪かつた。」

「ポロンさん、あの、すみませんでした。えつと、結果として、な

つたわけですが、覗きついなどと云つやましい考えはありませんでした。信じてください。」

「・・・」

二人の「きじりない謝罪」に対しても何一つ反応は無かった。

「謝つてゐるだろ、何とか言えよ。」

何も言わないポロンに苛立ちを覚え、ルーカはポロンの肩に手を掛け、こちらを向けた。

（スーウ、スーウ、）

が、そこには無邪気に寝息を立てるポロンの寝顔があるだけだった。

「俺達も、寝るか。」

「そうしましよう。はあー。」

ルーカとカイトは、ポロンの寝顔を見ると、肩の力が抜け、ため息を吐いた。それと同時に、怒りが込み上げてきたが、その純真な寝顔には勝てなかつた。ルーカはソファード、カイトはもう一つのベッドに寝ようと、準備を始めた。

（コン、コン）

二人が眠りにつこうとする最中、誰かがドアをノックしてきた。ルーカは警戒する事無くドアに近づいて行つた。

「待つてください。」

「どうしたんだ。」

カイトはルーカがノブに手を掛け回そうとするのを止め、部屋の明かり消した。そして、ソファードの上からルーカのガンファーを取り、投げ渡した。

「こんな時間に変ですよ。気をつけてください。」

「分かつた、」

カイトの忠告にルーカは静かに頷き、覗き窓から廊下の様子を伺つた。覗き窓の向こうには、ガラの悪そうな三人の男が、下品な面構えでこちらを見ていた。ルーカはガンファーを持っていない手でカイトに合図を送る。カイトは腰の木剣を抜きルーカの元へと静かに移動した。

「うん。」

二人はドアの両端に別れそれぞれの武器を構え賊が入つて来るのを待つた。ドアのノブがゆっくりと回つた。二人の武器を握る手に力が入つた。

「はつ、」

（ガシャーン）

その時部屋の窓が割られ、一人の男が入つてきた。

「クツククツ。」

ナイトスネークのリーであった。リーは一人を見て無気味に笑つた。ルーカと、カイトがそちらに目を奪われた瞬間、ドアが勢い良く開き、三人の男が二人に襲いかかってきた。三人の男の拳にはメリケンサックが握られ、黒皮のパンツとジャケットで決められていた。

「ルーカ、奴等、ナイトスネークです。気をつけてください。」

「なんでそんな奴等が、」

ルーカとカイトは狭い入り口付近で三人を相手に突きを主とした攻撃を繰り返し、一人を倒した。その間に、リーはポロンを肩に担ぎ、つるしていくロープに捕まり下へと降りて行つた。

「ルーカ、」

「待ちあがれ。」

ルーカはその場をカイトに任せ、リーを追い窓へと向かつた。リーは自分が降りてしまうと持つていたナイフを投げ、屋上からロープを切り落とした。

「くそつ、」

「ルーカこの高さでは危険です。階段から行きましょう。」

残りの賊を倒したカイトはその状況から部屋を出て階段を使う事を進めた。

「うおおー。」

「ル、ルーカ。」

ルーカはカイトの忠告を無視して窓から下へと飛び降りた。

（ターン）

静まり返った夜の道にルー・カのブーツ音が響く。ルー・カの足に電流が走った。数秒間、動けずにいたルー・カだつたが、ゆっくりと動きはじめ、やがて普通に走つていった。

「まったく、無茶な人ですね。常識と言つものが通じない。」カイトは窓から降りる事を避け、カウボーイハットを深くかぶり階段から後を追うことにした。

騒ぎを聞きつけ隣接した部屋のハンター達がカイトの部屋の前に集まってきた。

「派手にやらかしたな。」

その中で地元の髭面中年ハンター・ライクが方膝をつけ、側に倒れ込んでいる男の腕章に目を向けた。腕章には八匹の蛇が絡み合い牙をむいている。

「こいつらナイトスネークのメンバーじゃないか。」

ライクは立ち上がりカイトに言った。

「すみません、事情は後で説明します。ここの中にお願いできますか。」

「それはいいが、お前それだけの装備で十番地区へ行く気か。」

ライクはカイトの身を気遣つた。

「はい。行きます。」

「どう言う事情かは知らん。が、無謀と勇気とは違うんだ。それでも行くなら、これを持つていけ。」

ライクはカイトに自分の腰にぶら下げていたシルバーのS・A・A 45ピースメーカーを投げ渡した。

「後でお返しします。必ず。」

「必ずだぞ。」

カイトはライクの言つ言葉に深い意味を感じ取りながら頭を下げ表へと向かつた。

「今度は何事ですか。」

キヤスは髪を振り乱しながら走つてきた。

「なあーに、いつもの事だ。キヤス。」

「何がいつもの事ですか。それで誰が狙われたんですか。ライクさん。」

キヤスはライクに尋ねた。ライクは親指を立て、扉の無い部屋を指差した。キヤスの顔から血の気が引いていった。

ナイトスネークの溜まり場であるナイトメアの前には、数十台のバイクが爆音を轟かせ祭りの始まりを待っていた。

「今夜は祭です。存分にお楽しみください。」

（ウォーッ）

ジャッカルの一聲で、メンバー達は奮起し、その異様な叫びは、遠く離れた地区にも響き渡った。

「まだ、リーが戻りません。」

異様な雰囲気の中、ジャッカルに幹部の一人が耳元で囁くように話した。

「リーは祭り好きです。騒ぎを聞きつけすぐに来るでしょう。」

ジャッカルは店の前でポケットから手を出し軽く上げ、その手を振り下ろした。それを合図にメンバー達はバイクをハーデスの本拠地であるガイア（酒場）に向け走らせた。この地区はすり鉢上になつており、ガイアはこの中心に位置していた。すなわち今現在十番地区を仕切っているのはハーデスと言えた。

「行くぞ。」

幹部の一人が先陣を切つてバイクを走らせる。メンバー全員の最後部、数人の幹部達に守られ、ジャッカルもバイクを走らせる。一路、擂鉢の中心に向かつて・・・。

そのころ、ルーカはリーを追い、三番地区から十番地区に向かつてバイクを運転していた。

「待ちあがれ、ポロンを返せ。」

ルーカはポロンを助けるため、リーの後を追跡した。周囲に彼等以外の姿はなく、静けさだけが周りを支配しているかのようだった。リーは三番地区を南へ走り、やがて無法地帯である十番地区に舞い戻った。十番地区の路上には浮浪者の姿は無く、ただ遠くでバイク

のアクセル音が響いていただけだつた。

「祭り、」

リーは騒ぎを聞きつけポロンを抱えたままバイクをガイアの方角へ走らせた。ルーカもそれを追い、乗りなれないバイクを走らせる。路地を抜け徐々にその差は徐々に縮まつていた。後少しと言つ所で前方に眩いほどの明かりが見えてきた。

「な、なんだあれは。」

「クツ、クツ、クツ、もうおしまいだ。」

何が起こつているかわからないルーカはその光に呆然としバイクを止めた。リーは光に向かい一直線で突き進み、その姿を消した。ルーカはバイクを捨て、光の方へ警戒しながら進んだ。

（ドゴーン、）

爆音とともに建物が吹き飛び、炎が立ちあがつた。ジャッカルが祭りの時に行つ、祭り火だつた。祭り火とは燃え盛る舞台の周りをバイクで囲み外側に向かいライトを点灯させる事であつた。この場合、舞台とはハーデスの溜まり場であるガイアである。ガイアの中から火だるまになり転がり出るハーデスのメンバー。その中にはハーデスのヘッドであるブックの姿もあつた。戦力の大半を失い残りのハーデスのメンバーはその行為に激怒し、ナイトスネークのメンバーは狂喜乱舞した。

祭りは始まつた。ハーデスのメンバーは鉄パイプやチエーンなどで襲い掛かってきた。ジャッカルは無言であごをしゃくる。ナイトスネークのメンバーはそれを切欠に交戦を始めた。

そんな中、ルーカは建物の影からリーの姿を探した。

「いたつ、」

ルーカはナイトスネーク側を、最後部に向かい足早に進むリーの姿を見つけた。ルーカは建物の裏手からリーの後方へと回り込もうとした。その時、

「誰だ、お前は、」

「ハーデスのまわし者か。」

ルークはうかつにも数人の男達に見つかってしまった。その姿、黒い皮の衣装、上着にはルーク達を宿舎で襲つた男達と同じ腕章、直ぐにナイトスネークだと分かつた。総勢5名、そのうち2名が銃を携帶していた。

「見つかつたみたい。それじゃあ、堂々と行くか。」

ルークは腰にぶら提げていた6.8式ガンファーに手を掛け、銃を持つ二人の男達に突進、そして抜きざまに一人の男を薙ぎ倒した。男達は銃に手を掛けるまもなく気を失つた。すぐに違う男がルークの後方から頭部めがけ槍を切り下ろした。が、ルークは後方飛びで体をひねり、相手の懷へ入り込みガンファーですばやく逆手で受け流した。男の体制は崩れ前ががみになる。ルークは男の喉元にガンファーを突き込んだ。男は白目をむきルークに支えられるように力尽きた。ルークはその男を側に寝かせ、残りの二人を睨み付けた。残りの一人はルークとの距離を取つた。

「な、なんてやつだ。お前はこの事をジャッカルさんに知らせる。」  
「わ、わかった。」

「ぐわっ、」

そう言つている間にも、また一人、ルークはナイトスネークのメンバーを倒していった。そして残りの一人もジャッカルの元へ行く事はできなかつた。事を終えたルークは遠くから戦況を確認する。抗争はエスカレートしていくが明らかにナイトスネークが有利に運んでいた。

「こりやーヤバイ状況だな。少し様子を見るか。この状況ならボロンの奴に危害が加わる事はないか。」

いくら無鉄砲なルークでも、この状況でボロンの元へ行くのは危険すぎると感じ取つた。やがて、闇夜に紛れるように姿を消し、人数が減るのを待つことにした。

抗争も佳境を迎へ、ジャッカル率いるナイトスネークが圧倒的に有利な戦況となつていた。その時、一台のバイクが無人で抗争のど真ん中に走り込んできた。そして、燃え盛るガイアに向かい突つ込

んだ。

(ドガーンンンー)

バイクはバラバラに吹き飛び、タイヤだけがその形のままハーデスとナイトスネークの間にゆっくりと転がってきた。

「だれです、祭りに水を差すのは、」

ジャッカルは咥えていた煙草を側にいる幹部の額で押し消した。双方のメンバーは抗争中だと言う事も忘れ周囲を見渡していた。

「双方引けー、」

バイクの走つてきた方向から叫びにも似たカイトの声が轟いた。

「カイト。」

ビルの屋上からその状況を見ていたルーカは驚き目を丸くした。

カイトは右手に愛用の木剣を引き、下げゆっくりと双方の合間に足を踏み込んできた。その堂々たる進行と、殺気に満ちた眼光、少しでも力ある者にはそれが何を意味しているのか分かつた。そう言う者達はカイトの進行を阻むどころか後ずさりをし、道を開けた。

「貴様、ここを何所だと思つていいんだ。」

「おい、俺達が誰なのか教えてやろうか、腕づくりで、」

それすらもわからぬ愚者はカイトの間合いにうかつにも近づいた。

「よ、よせ、」

リーザの忠告もむなしくカイトの腕が瞬時に動いた。

(ピコーシ・・・ドサ)

すでに遅かった。カイトに近づいた愚者達は痛みを感じる様子もなくその場にひざまずき、そして倒れた。

「もう一度言つ。双方引け、」

その言葉に十番地区全体が共振したかに思えた。カイトの歩みはなにも止まる事無くジャッカルの元へと進んだ。辺りには緊迫した空気が流れ静まり返っていた。カイトの進行の先に立ちはばかる者は誰一人いない。カイトの鋭い視線はジャッカルに向けられていた。

「よくお越しくださいました。金髪の狼さん、」

(ピクッ)

ジャッカルの言葉にカイトは顔色を変え、一瞬歩みを止めた。二人はしばらく見合つたまま静かな時間が過ぎた。

（パチン）

不意にジャッカルは指を鳴らした。その合図でカイトの前に一人の男が姿を現した。男は懐からナイフを抜き、カイトに向かつて構えた。

「ハーデスの諸君、もはや勝負は見えている。祭りは終わりにしましょう。悪いようにはしませんよ。」

ジャッカルに無条件降服を勧められハーデスの残党は武装を解いた。そして、ハーデスの残党を吸収したナイトスネークはこの地区の勢力図を一色に塗り替えた。

「お待たせしてすみません。フィナーレはあなたにお任せします。カイトさん。心行くまでお楽しみください。死合と言う余興を、クックククッ。」

ジャッカルの不気味なしゃべり声で全ての視線はカイトと男に注がれた。そして、それは死合開始の合図となつた。

「俺の名はザサン。いくぞつ。」

ザサンは背を丸めた前傾姿勢からカイトの懐に走り込んだ。そして素早く持っていたナイフをカイトの顔に向け幾度となく突き出した。そのスピードは常人の域を超していた。しかし、ザサンのナイフがカイトの顔に傷を付ける事は無かつた。

「流石ですねカイトさん。」

ジャッカルは不適な笑みを浮かべ呟いた。カイトはジャッカルの行動に気を配りながらザサンの連続攻撃をかわし続けた。

「ど、何所を見ている。勝負の最中だ。」

「じゃあ終らせましょう。直ぐにつ。」

カイトはそう言うと瞬時にザサンの懐に飛び込み、みずおちに木剣の柄頭を打ち込んだ。ザサンは声を発する事無く白目をむいた。

「さて、次は誰が行きますか。」

「次は俺だつ。」

「次は俺だつ。」

ジャッカルの声で、2メートルはある大男が名乗りを上げた。周囲はこの死合の雰囲気に飲み込まれた男達が興奮状態になっていた。「まよい。このままではポロンさんの身が危ない。」

カイトは瞬時にそう判断した。その時、

「お、おのれえーつ。よ、よくも。」

その興奮を覚ますようなうめき声が何所とも無く聞こえてきた。周囲の視線はその声の主に移り変わった。そこには黒焦げの男が小刻みに体を震わせながら立っていた。

「いまだつ。」

カイトはそのどさくさに紛れいつたんその場から離れた。

「逃げましたか。賢い選択ですね。に、しても誰ですかあの不細工な生き物は。」

ジャッカルは側近のリーに訪ねた。が、答えられるはずも無かつた。それほどに判別不能だつたからだ。

「ジャッカルつ、よくも俺のチームを。」

「誰かと思えばブックさんですか。見違えるほど醜い。」

「ほ、ほざけつ。た、たとえ俺一人になろうとハーデスは戦いを止めぬ。」

「ふうーつ。」

ジャッカルはブックから目をそらしたため息を漏らした。

「ジャ、ジャッカルつ。うぐつ、ぐはつ。」

それがブックの最後の言葉となつた。ジャッカルのため息と共にリーは素早くブックの背後に回り込み首筋の動脈を瞬時に切り裂いた。首からは噴水のように赤い水が飛び散りブックは崩れ落ちた。そして、焦げ臭い匂いと、生々しい血溜りをその場に残した。ガイアの前は一瞬にして凍りついたように静まり返つたかに思えた。

「ジャッカル、」

一人の若者の一声が周囲に木霊した。次の瞬間、

(ワアアアー)

波のような歎声が沸きあがり、直ぐに先ほど以上の盛り上がりを見

せた。

そのどさくさの中、今度はルーカがジャッカルの背後に回り込んだ。そして背後からガンファーを突きつけた。リーは即座に態勢と整え攻撃の期を捜した。

「ポロンは返してもらひつ。」

「君はこの少女のお連れの方ですね。」

ジャッカルは表情ひとつ変えず、慌てる事無く片手を軽く上げ、リーの行動を制止させた。

「ルーカ君だつたね。リーから聞いているよ。しかし、この状況下で君達が生きてこの場から逃げる事は難しい。」

ルーカはジャッカルの話に耳を貸すことなく、さらに強く、ガンファーを突きつけた。

「リー、お嬢さんをお連れして。」

ジャッカルが妙にやさしい口調でそう言つとリーは部下にポロンを連れてこさせた。

「一つ、面白いゲームをしましょ。」

ジャッカルは不敵な笑みを浮かべ、ルーカに話し掛けた。

「警戒する必要はないよ。簡単なゲームだからね。そして、それが終ればあなた達は開放されます。ゲーム終了後の状態のまま、」

ルーカは無防備に立つて居るジャッカルにガンファーを突きつけたまま身動き一つ出来ずにいた。ジャッカルはそつと右手を上げ何かの合図を仲間に伝えた。

「な、何をする気だ。」

ルーカは強い口調で言つた。しかし、ジャッカルはそんな事きにせず行動を続けた。そして、何もする事無くポロンを広場の中央に寝かしジャッカルの元へと戻つた。

「それでは説明します。」

「待つてよ。ゲームをする気はない。」

「そうはいきません。もう既に始まっていますしね。」

ジャッカルの言葉通りゲームはすでに始まっていた。辺りには灯

油の匂いが立ち込め数人のメンバーがその灯油に火を放っていた。左右から灯油のライン通りに炎が走り一つの木造建築物に向かつていた。すぐにその場所まで到達するとじわじわと建物を燃やし始めた。

「あの建物にはハーデスの奴等が闇商人から買つた武器・弾薬が大量に保管されています。感の良い一力君なら後は分かりますね。」

ジャッカルは視線だけをルーカの方へ向けた。

「それでは最初の暴発が開始の合図です。最後まで立っていた者が勝者。楽しいですよ」

ジャッカルの薄気味悪い笑いは、ルーカに焦りを生んだ。

「じゃ、ジャッカルさん、我々はこれ、これで、」

「何を言つているんですか。これから始まりです。それとも私のゲームに付き合えないとでも、」

「い、いえ、と、とんで、もない。」

ジャッカルの常軌を逸したゲームに全てのメンバーは引く事も、押す事も出来ずに運を天に任せた。誰一人その場を去る事無く時間は過ぎ去つていく。炎は建物の周りから内部を覆いつくしていった。

（ゴクリッ）

誰もが息を呑む。そして次の瞬間。

（ダーンッ）

最初の暴発が始まった。

「うぎやーっ、」

「くつ、くつ、くつ、さあー誰が残りますかね。」

最初の暴発で、一人の男が悲痛な叫びとともに腹部を両手で押さえ倒れこんだ。ジャッカルはなおも笑い続けた。その暴発をきっかけに次々と暴発が続いた。その度に周囲のメンバーは傷つき倒れていった。ルーカはジャッカルを睨み付けながらも死を意識していた。額には冷たい汗、動かない体、ジャッカルの落ち着いた態度、全てが自分より上だと実感させられる。その間にも、脱落者は増えている。いつたいどれだけの犠牲者が出るのか誰にもわからない。み

な、

（ただ今を生き延びれば、）

とだけ考えていた。ジャッカルを除いて・・・

ジャッカルとルーカの間にはポロンが仰向けのまま寝かされていた。その近くにも弾丸がかすめ微かな砂煙と小さな傷を残した。

「ポロン、」

「うーん」

ルーカは思わず声を発した。ポロンはその声に反応するかのように反転した。そのすぐ後、弾丸が先ほどの位置に当たり砂煙を上げた。

「運がいいですね。」

ジャッカルの言葉にルーカは思わずいきり立ち攻撃を仕掛けようとした。

「だめっ、」

ポロンの言葉にルーカは飛び出すのを押さえた。目の前を、弾丸が光の帯をだし駆け抜けた。ルーカはその光景をしつかりと眼に焼き付けた後、その視線をポロンに向かた。

そのころカイトは、周囲を見渡しゲームの現場に一番近い消火栓を見つけた。

「これでいいけるでしようか。」

カイトは咳きながら消火栓の前で木剣を抜き、居合いの構えを取りながら前傾姿勢になつた。

「ハーアーッ」

気合にも似た掛け声でカイトは腰の横で構えていた木剣を横一閃に走らせた。カイトの斬撃は消火栓を無意のうちに切断した。切り口から水が吹き出し高々と噴出された。それを確認すると、カイトは次々と近くに設置されている消火栓をまるで据物切りでもするように切断していった。吹き出した水は擂鉢状の中心、ガイアに向け流れて行つた。

「後は勝手に鎮火するでしょう。とにかくルーカの元へ急ごう。」

カイトは木剣を背中に納刀すると火災現場へと急いだ。

カイトの機転を利かせた消火活動によつて武器庫は瞬く間に鎮火していつた。木材の焦げる匂いと水蒸氣が立ち込める中、ずぶぬれになつたルーカとジャッカルが動く事無く見合つていた。

「ゲーム終了だ。」

「くつ、くつ、くつ、そのようですね。楽しかつたですよ。今までで最高のゲームでしたよ。」

ルーカは深く構えジャッカルの今後の動きに注意を払つた。ジャッカルは薄氣味悪い笑いを浮かべ、ルーカへ近づこうと一步を踏み出した。

（ダーンツ）

その時、完全に鎮火したと思われていた武器庫から一発の弾丸が発射された。弾丸は焼け残つた柱を突き抜けジャッカルのこめかみで止まつた。ジャッカルはゆつくりとその場に膝を突き、そして重力に引かれる様に地面に顔を付けた。その後ジャッカルは動く事無く、全ては静かに終わりを告げた。

「結局、最後の最後にツキに見放されたのはジャッカルだつた。それだけです。帰りましょ。宿舎へ。」

カイトは茫然と立ち尽くすルーカに近づきそう言つた。

ルーカは生きている事が不思議だという表情でカイトを、そして倒れているジャッカルを見つめた。

「これが、ジャッカルの生き方だつたのか。」

ルーカは悲しげな表情でとボソリ呟いた。

「ペッペッ。ごふおごふおな、な、何よ。何がどうしたの。なんで私こんな場所で水浸しになりながら寝ていたの。ちょっと説明してよ、二人ともつ。」

水で呼吸器官を塞がれようやく目覚めたポロンは、慌てて飛びおきた。そして、状況を把握することなく激怒した。ルーカはポロンの声で全てが終つた事を実感し安心の笑みを見せた。カイトもそれにつられるように笑つた。

「何よ、説明してよ。」

ポロンは一人の笑みに苛立ちを覚え癪癪を起こす。

「帰ろう。」

「そうしよう。」

「一人だけで納得しないでよ。」

依然納得のいかないポロンを含め、三人は殺伐とした十番地区を離れた。

十番地区を後にした。宿舎につく頃には、東の空に赤味が射していた。事務局裏手、宿舎の時間外出入り口についた三人を出迎えたのはライクとキヤスだけだった。キヤスは安堵のため息とわずかな涙をこぼした。

「ただいま。」

「よく戻つたな。」

ライクの一言には重みがあった。彼はカイトの手を熱く握りしつかりと視線を合わせた。

「あれつ、お姉さん待つていてくれたんだ。心配だつた。」

「ド、ドアの修理代踏み倒されないよう待つていただけよ。」

ルーカの意地悪な質問に、キヤスはわざと顔を背け冷たい態度を取つた。

「キヤス、いつからそんなに仕事熱心になつたんだ。今まで何人のハンターが修理代踏み倒しても経費で落していたのに。」

「もおおつライクさん。」

ライクはキヤスに冷やかしを投げかけた。キヤスはすねたように宿舎の中に入つてついた。その場にいた全員は笑みをこぼした。

「さあ、キヤスが「一ヒーとパンでもてなしてくれる。」

ライクがそう言つと、ポロンとルーカは走つて中には行つてついた。そして、一人の後をライクが続こうとした。

「ライクさん、これお返しします。」

カイトは腰からピースメーカーを抜き、差し出した。

「お前はこの銃と相性がいいらしい。この銃は今まで幾度と無く俺を死の縁から生還させた。そして、今度はお前が生還した。その銃

はくれてやる。」

カイトは黙り込み銃を見つめた。再びライクは中へと向かつ。

「ライクさん、ありがとうございます。」

「なあーに、銃がお前を選んだんだよ。コーヒーが冷めちまつ。中へ入ろ。」

「はい。」

カイトの明るい声が人気の無い道に響いた。

## 僕が僕であるために

僕が僕であるために

翌日、ルーク達はキヤスのいる受け付けへと向かった。

「おはようキヤスさん。」

「おはよう。」

ルーク達はキヤスに挨拶をした。キヤスはルーク達と少し話し、本題へと入つていった。

「これが今回の仕事よ。」

「どれどれ」

キヤスがルークに仕事内容のかかれた書類と遠距離からの写真を手渡した。その書類にカイトとポロンが両端から顔を覗かせる。

「それから、今回の任務終了後に支払われる報償金から宿舎の修理代を天引きさせてもらうわ。いいわね。」

「はい、おねがいします。」

キヤスは厳しい表情で三人を睨み、念を押すとともに請求書を渡した。

「それじゃあ、修理代、がんばって稼いでね。」

キヤスは請求書の控えを振りながら三人を見送った。三人は肩を落とし静かに事務局をでた。

書類に書かれた仕事内容は、次の通りであった。

依頼書

場所

カスター・ルから南東へ600km、ゴヘイズ砂漠、砂の川・下流・  
20エリア・ハーゲルとの国境付近。

対象珍獣

デザートアリゲーター

性質

雑食性・本来、人を避け行動している。極めておとなしい性質。

備考

デザートアリゲーターは、このエリアには生息しない。国境の柵を壊しこのエリアに侵入してきたと思われる。現在2人の旅人がこの珍獸に遭遇し、大怪我を負ったと言う報告を受けている。現在保安部隊が捜索中であるが依然発見できない。F・ハンターは直ちにこの珍獸を発見し駆除してください。生死を問わない。

以上

依頼書に目を通したボロンは、持つているお金で旅支度を整える事を提案。ルーカはその提案に挙手して賛成した。

「旅支度は一人でやつてもらえませんか。私はちょっとよりたい場所があります。」

即座に準備を始める一人にカイトは声を掛けた。

「そうか、じゃあ正午に町外れで会おう。」

「正午に町外れですね。分かりました。」

カイトはルーカ達と約束を交わすと、一人に背を向け中央の保安本部へと向かった。

保安隊本部・・・一番地区中央に位置し、地上四階、地下一階コンクリート建ての立派な建物。このエリアにある十八の保安隊全てを統括し指示を出す集中情報部。また、銃から車に至るまで整備・改良を一手に引き受けるメンテナンス部。他にも優秀な人材を見つけ保安隊に勧誘する人材派遣部、などがある。

カイトは本部に入ると、「整備課」と書かれた扉を開けた。

「こらっ、てめえら道具を雑に使うな。そこっ、おう、てめえだ。とつとと仕事にかかるんか。」

ひとたび扉を開けると、威勢の良い怒鳴り声が工場中に響き渡つていた。カイトはその声を発している、白髪の老人の側に近づいた。

「ここは、関係者以外、立ち入り禁止です。御用があるなら受け付けの方に、」

工場関係者と思われる、白いつなぎを来た若者が丁寧な口調でカイトに警告した。

「おっ、珍客到来だな。」

作業員の声に気付き、白髪の老人は振り向きカイトを見た。そして、尖らせていた口元を緩ませた。

「御久しぶりです。おやつさん。」

カイトはその老人に深深と頭を下げた。

「おう、俺の知り合いだ。おめえは仕事にいきな。」

「そうですか。判りました。作業に戻ります。」

若い作業員は老人に言われ、ペコリと頭を下げ小走りに作業場へと戻つていった。

「どうした坊主、おめえ、確かにここ抜けたんじゃーなかつたのか。」

老人はカイトに笑みを見せながら話す。カイトは事の次第を話した。「ワツハツハ、そうか、あのドタバタ、おめえの仕業だつたか。これで少しの間、十番地区も小競り合いだけで、大きな動きは無いだろう。」

老人は工場中に響き渡るほど大きな声で哄笑した。周囲の視線は二人に向けられ、動きが止まった。

「なに見てんだ。よそ見するには十年早えーぞ。」

視線を感じ、老人は怒鳴り声を上げた。周囲は一瞬にして動きだした。

「相変わらず、手厳しいですね。」

カイトは、苦笑を浮かべた。

それからしばらく余談が続いた。

「・・・で、何なんだ。頼みがあるんだる。」

老人は先ほどとは打つて変わつて真剣な顔付きになつた。

「率直に言います。そちらで使つてているサンドバイクを2台御借りしたい。」

カイトは真顔で頭を下げた。

「出来ん。」

カイトは即答する老人に顔を上げ鋭い視線を走らせた。

「そう気張るな。出来んと言うよりも、無いんじや。全部出払つて

おる。」

老人は腕を組み渋い顔で答えた。

「そうですか、時間を取らせてすみません。それでは、」

カイトは早々に礼を済ませこの場を後にしようとした。

「坊主、そうせくな。まあ、話しても聞いていけ。」

老人は、帰ろうとするカイトを呼び止め話し始めた。

「保安部隊総動員でデザートアリゲーターの捜索中だ。サンドバイクを使用している。もしあるとすればロジンの所じゃろうな。」振り向く事無く聞いていたカイトの体がピクリと反応しすばやく老人の方に駆け寄った。

「ロジン、『解体屋のロジン』ですね。あの十番地区の。」

カイトの顔に笑みが浮かんだ。

「ありがとうございます。」

カイトは一礼して走り出した。

「十番地区は昨日の一件で何が起ころるかわからん。まつ、あの坊主には関係の無い事か。」

老人はその姿を見送りながら一人呟き、またいつもと変わらぬ口調で作業員に激を飛ばした。

情報を得たカイトは二人に合流、事情を説明し一人、十番地区に向かつた。昨日の余韻が残る十番地区。カイトは中央広場から東へ十分ほど離れたスクランプ置き場へと向かつた。

「おい、小僧」

途中チンピラ風の二人組に絡まれる、が、

「力、カイトさん。失礼しました。」

カイトの顔を見るなりとつと姿を路地の奥へと隠した。カイトは目的地に着くまで何度も絡まれるが言葉発する前に事は収まった。

「また、悪ガキか。今日という今日は、」

がつちりとした肉付きのスキンヘッドの男がカイトの肩を持ち強引に振り向かせた。そして、大きく振り上げた拳をカイトの顔めがけて打ち込んだ。カイトは反射的に拳を受け流し、その力を利用して

スクラップの山へと投げ倒した。男は受け身を取る事無く、スクラップの山へと体を沈めた。

「ううー、ちいきしよう。あつカイト、カイトじやねえか。」

「ロジン、」

カイトは慌ててロジンの体をスクラップから起こし上げた。ロジンはカイトをつれ倉庫の脇にある事務所らしき小屋へと向かった。

小屋には油で汚れた机と椅子、そして、数多くの書類が納められた棚があるだけだった。ロジン以外の人影はなく、ラジオから古い音楽が流れていた。カイトはこれまでのいきさつをロジンに語った。ロジンは自分の椅子に座つてその話を静かに聞いていた。

「そういう事か。まあお前の頼みなら無くても出さなきゃならねえな。」

ロジンはそう言つと席を立ち奥の倉庫へと向かつた。

「さあ、これを持つていけ。」

ロジンはシートを取り除いた。最新式の三輪サンドバイクが姿を現した。大きなボディーに溝の深いタイヤ、補助輪の様に付けられた特殊スキー板が装備されていた。それ以外にもオプションで10m機関砲が二つ、ヘッドライト横に装備されていた。最高スピード砂上28ノット、陸上80キロを絞り出すモンスターバイク。

「10mm機関砲は必要ないと思うけど。」

「用心に超した事はない。」

ロジンは持つっていたキーをカイトに投げ渡した。

「恩に着るよ、ロジン。」

カイトはそう言つとサンドバイクのエンジンをうならせルーカ達の待つ町外れへと急いだ。

町外れの木下、ルーカとポロンはその木陰に座つてカイトの到着を待つていた。やがて、町の方から砂塵を上げて向かってくる何かを発見した。それがカイトである事は直ぐに確認できた。

「二人ともお待たせしました。」

カイトは木の側でサンドバイクを停止させゴーグルをはずした。

「カイトおかれり。」

「どうしたんだそのへんてこな乗り物。」

町外れで待っていたルーカとポロンははじめてみるサンドバイクに驚きを隠せなかつた。

「へんてこな乗り物・・・ああ、これはサンドバイクです。砂漠の移動に欠かせない乗り物ですよ。」

「ま、まさか、また借金したんじやないのかカイト。」

ルーカはカイトに疑いの目を向けた。

「は、はは、借りてきたのですよ。古い知人に。」

カイトは顔を引き攣らせながら答えた。その後、三人は準備された荷物をサンドバイクに積み込んだ。

準備を終えたカイトはサンドバイクに跨りキーをポケットから取り出した。

「あっ、ちょっと待つた。」

ルーカはカイトに声をかけた。そして、布袋から三本のナイフを取り出した。

「これ、持つてろよ。」

ルーカはそう言つて一つをポロンに手渡し、そしてカイトにもう一つを投げ渡した。カイトはナイフを受け取ると子供のような笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。それじゃあ、これをお返しします。」

カイトは懐から一枚のコインを出しルーカへと渡した。

「これはどういう意味だ。」

「ナイフを貰つた時はコインを返す。とある国に古くから伝わる習慣です。」

「習慣、」

「習慣、」

カイトの話にポロンは不思議そうな顔で聞き直した。

「そう、習慣です。ナイフで友情が切れないようにと願いを込めて。」

「習慣、」

「友情が、」

ルーカは自分のナイフを握りしめ呟いた。

「それじゃあ、仕切り直しでしゅっぱーつ。」

ポロンの元気な声が空高く響いた。

三人はラボン山脈を迂回し、ゴヘイズ砂漠を南下、目的地に向かった。砂漠には所々ロックマウントと呼ばれる草木の無い一枚岩がある。たいてい数十メートルの大きさであるが、なかには数キロにも及ぶ。そういうものには亀裂があり、それは迷路の様に入り組み、動物でも迷い込んだら出られなくなる事がある。しかし、この砂漠に取つてこの場所が唯一の日陰であり休息の場でもあつた。その場所以外の大地は全て砂で覆われ昼間は50まで上がり、夜になるとマイナス十五度まで下がつてしまつ。そのためこの地域に生息する生物は日中、砂の中に潜り夜になると活動する夜行性動物がほとんどであった。数時間はこの風景が続いた。

「あつ、カイト、あそこで何かが飛び跳ねている。」

ポロンは遠くで何かを発見、指差し二人に伝えた。

「あそこは砂の川ですよ。多分ポロンさんが見たのは砂イルカだと思ひます。」

「砂の川、何だそれ、この辺に川は無いはずだけど。」

ルーカは不思議そうに地図で確認しながらカイトに尋ねた。カイトは笑みを見せ、ルートから外れ砂の川に近づいて行つた。

砂の川・・・28エリア中央から20エリアに向かつて流れている。全長数十キロ、幅は十数メートルのところから数百メートルのところまである。深さはいまだ分からない。地学者の間では流砂の一種ではないかと言われているが、それも定かではなかつた。砂イルカや砂鯨などこのエリアでしか見ることのできない珍獣も数多い。カイトの説明を受けながらしばらく砂の川沿いを走つていた。時より砂イルカの群れがサンドバイクに並んで泳いだ。ポロンは嬉しいハプニングに歓喜の声を上げた。

「そろそろ、元のルートに戻ります。」

カイトは川沿いからサンドバイクを離した。楽しい時間も終わりを

告げ、殺風景な景色がまた三人の眼前に広がった。砂漠の風景を見ながら途中でターゲットとの遭遇を期待した。しかし、ターゲットらしき物蔭すら発見できず目的地は近づいてきた。

目的地に到着した三人は、防塵サングラスを外し、茫然とした。エリアガードと呼ばれている直径30mmはある特殊鋼で編まれた有刺鉄線が蜘蛛の巣でも搔いたように切り裂かれていた。さらにそれを支えていた鉄柱は無残に折れ曲がっていた。ルーカはすぐさまサンドバイクから飛び降りその場へ走り寄った。その場所は砂の川から数キロ離れた場所に位置していた。

「ひどいありさまだ。カイト、お前もこんな風に出来るか。」

切り裂かれた有刺鉄線に触れながらカイトに尋ねた。

「・・・」

カイトは背中の木剣を抜き無言で眺めた。ルーカは立ち上りカイトの側へと寄った。

「とにかくどこかにベースを造らないと。」

ポロンはこの雰囲気をなごます様に陽気に話し掛けた。

三人は近くのロックマウントにキャンプを張る事にした。その場所はエリアガードから数キロ離れ、その頂上からは砂の川そして砂丘が広がっていた。どんなに狂暴なデザートアリゲーターであっても砂の中を根城にしている彼等が襲つてくる事はない。

「それじゃあ、私が食事を作から、ルーカとカイトはゆつくり作戦でも練つていて。」

早速ポロンはバックの中から携帯固体燃料を取り出し料理の準備を始めた。ルーカとカイトは顔を見合わせうつすらと笑みを浮かべた。そして、ポロンの方を少し見て、その場に腰を下ろした。

「夜を待つのか。」

「ええ、夜になるとデザートアリゲーターの動きが活発になります。その時を見計らつてやつの行動範囲を調査して、」

「痛つ、」

カイトが話している最中、ポロンの微かな声が一人の耳に届いた。

カイトはすぐにポロンの方へ駆け寄り、状況を確認した。どうやら調理の最中に指を切つたらしい。人差し指の先端部から血がにじみ出し、ポタリと地面に落ちた。カイトは傷口から少し離れた場所を布で縛り止血を試みた。

「思ったより傷が深い。今はじつとしていてください。」

「判つたわ。カイト。」

止血の後、カイトはポロンの指に消毒液を掛け、包帯を巻き、応急処置を施していた。

「それじゃあ俺はこの辺を散歩して来るよ。」

ルーカは岩場から少し放れた砂丘へと向かつていった。

「大丈夫かな。」

「なあーに、デザートアリゲーターは夜行性。昼間は砂の中深く埋まっています。」

カイトはやさしくポロンの不安を払い消した。そして、ポロンの側に座り持つていた証拠写真に目を向けた。

「こ、これはっ。」

カイトは持つていた写真を食い入る様に見つめた。

そのころ、カスター・アリゲーターの事務局でも同じ異変に気付いた者がいた。

「こ、これって、」

キヤスは受け付けの郵便物に目を通し慌てた。

「だ、誰か、ライク、ライクを呼んでつ。急いでつ。」

キヤスは事務局に響き渡る程の大声を発した。管内があわただしく動き出し、F・ハンター・ライクに緊急招集が掛けられた。

カイトは写真を見ながら茫然とした。

「デザートアリゲーターじゃない。」

カイトは呟いた。

「どう言つことなの。」

ポロンは不思議そうに尋ねた。

「こ、の距離から撮影されたのが事実ならば、こ、のデザートアリゲーターの体長は推定4メートル。」

「4メートル。ちょっと待つて。」

ポロンは慌ててポケットに入っていた図鑑を開いた。

「そんなデザートアリゲーターなんていない。そんなアリゲーターが、」

ポロンは話の途中言葉を失い、顔から血の気が引いていった。

「そんなアリゲーターは、ロックアリゲーターしかいない。」

カイトはそう言つて黙り込んだ。一人はしばらく岩の上に腰を下ろし風の吹き抜けしていく方向を見つめていた。

「風下に血の匂いが流れた。ロックアリゲーターは視力が弱い分、嗅覚が発達している。数十キロ離れた場所からでも血の匂いを嗅ぎ付ける。この場所も危険だ。」

「あつ、」

二人は同時に何か大切な事を思い出した。風の吹き抜けた方向には砂丘が広がり、その砂丘には先程ルーカが向かつていったのだ。二人は目を細めルーカを捜した。果てしなく続く砂丘。照り付ける太陽に蜃気楼が見えるだけで人影など見当たらない。

「何所だ、何所に、」

「いたつ、あそこ。」

ポロンはルーカらしき人影を発見しカイトに伝えた。そして、大きく手を振りアピールした。カイトはそんなポロンの手を引っ張り、岩山を下りルーカの方に近づいた。人影はやがて輪郭をはっきりとさせ、ルーカである事が分かるまでになつていった。ルーカは何事も無く手を振り返し、薄ら笑いを浮かべ、こちらに向かってきていた。

「どうやら心配無いようだ。」

「そおーね。」

二人は安堵の表情を浮かベルーカが戻つて来るのを待つた。やがてルーカの笑顔が引きつり、早歩きへと変わつていった。

「ルーカ、あのねつ。」

ポロンはルーカが近づくと、慌てて事の真相を話そうとした。が、

ルークは何も言わず一人の手を引つ張り岩山の上へと上り始めた。その顔からは笑みは消え深刻な表情だった。その時、後方の砂丘が吹き上がり大きな物体が姿を現した。その物体は砂塵を上げ猛スピードでこちらへと向かってきた。砂の中をまるで泳ぐかのように目とじつじつした背中を出し、しつぽで舵を取りながら進んでくる。物体がロックアリゲーターであることは、直ぐに分かった。

「カイトつ、サンドバイクにエンジン、」

「わかりました。」

カイトはすばやくサンドバイクに飛び乗りキーを回し、アクセルを吹かせた。

「あつ、荷物つ、」

ポロンは焚火の側に置いてあつた荷物を拾い始めた。ルークはそんなポロンの手を強く引っ張り強引にバイクへと乗せた。集めていた荷物のほとんどはその拍子にポロンの手の中から落ちるが、ルークはそんなことに構わなかつた。ロックアリゲーターは砂の上から這い上がりロックマウントにその全貌をさらけ出した。全長4メートル強、推定体重1トンその姿まさに怪物。

「良いぜ、カイトつ、」

その言葉を待つていたかのように、カイトはアクセルを絞り込み、ロックアリゲーターに背を向け岩の丘を下り出した。ものすごいGがルークとポロンにかかる。ルークは吹き飛ばされそうなカウボーアハツトを片手でしつかりと押さえ、後方を確認した。

「グオオオー、」

ロックアリゲーターは丘の頂上からこちらをじりりと睨み付け雄叫びを上げた。そして、猛スピードで丘を下ってきた。短く太い足からは想像できない速さであつた。所々に隆起した岩などお構いなく、次々と体当たりで破壊しながらサンドバイクめがけ突進してきた。

「げつ、追つてきやがる。カイトつ、もつと飛ばせー。」

「わかりました。しつかり捕まつていてくださいね。」

丘を下つたサンドバイクは砂塵を巻き上げロックアリゲーターとの

距離を少しづつ広げていった。やがて視界から完全にロックアリゲーターは消えた。

「こ」の辺で作戦を立て直しましょ。」

カイトは見晴らしのよい岩山を見つけ、頂上でバイクを止めた。

「ここならやつが何所から来てもすぐに分かるはずです。」

カイトは頂上から辺りを見渡しながら言つた。

「やっぱり追つてくるのか。」

ルーカはバイクから降り、服に付いた砂埃を払いながらカイトに尋ねた。

「ええ、多分。ロックアリゲーターは視力が弱い分、臭覚が発達しています。それに、この砂漠の風は横無尽に走つていて、何所にいても風上であり風下でもあるんです。だから、」

その時、遙か彼方に砂塵が巻き上がりつつあるのが分かつた。その砂塵はまっすぐにこちらに向かって近づいてきた。そして、数分後には三人の眼下にまでロックアリゲーターは迫つていた。三人は体をかがめ頂上の岩陰からロックアリゲーターの動向を見入つた。弱視のロックアリゲーターは血の匂いを探し周囲を嗅ぎまわっていた。やがて、ロックアリゲーターは嗅ぎまわる場所を限定しはじめた。

「逃げても無駄、」

「・・・の、ようですね。」

ルーカとカイトは自分の武器をしつかりと確認した。

「とにかくポロン、お前はここに残れ、いいな。」

「そうしていくください。後は僕達で何とかします。」

「ちょ、ちょっと待つてよ。」

ポロンの制止もむなしく、ルーカとカイトは岩山から飛び降りロックアリゲーターの側面に降り立つた。ロックアリゲーターはその爬虫類独特の目をユックリとルーカ、カイトのいる方へ向けた。そして、しつぽを左右に振り周囲の突起した岩をいとも簡単に破壊した。

「きますよ。」

「ああっ」

二人はそれぞれの武器を握り締め身構えた。ロックアリゲーターはその巨体を180度回転させた。

「どう言つつもりだ。俺達に背を向けて、」

「背を向けたのは広範囲の攻撃を仕掛けてくるつもりです。気をつけて、」

カイトの忠告が終わる前にロックアリゲーターの攻撃は始まつた。先ほど岩を粉々にしたしつぽでの強烈な攻撃だつた。ルーカ、カイト共にその攻撃をジャンプで交わし、その態勢からロックアリゲーター頭上へと懇親の一撃を叩き込んだ。

「どうだつ、」

ルーカ達の攻撃は見事に決まつたかにみえた。二人はロックアリゲーターの前方に着地、カイトは直ぐに反転し攻撃態勢をとつた。が、ルーカは油断から一瞬、その動作が遅れた。ロックアリゲーターはそれを見逃さなかつた。一人の攻撃は固い皮膚にはまつたく効いていなかつたのだ。それどころか着地したばかりの攻撃態勢が整つてないルーカに大きな口を開け突進してきた。

「ルーカ、危ない。」

カイトの顔が強張つた。ルーカの眼前にはロックアリゲーターの口が迫つていた。後方から振り向いただけの状態では交わせない、そう思つたからだ。

「きやあああー」

上から見ていたポロンは顔を両手で覆い悲鳴を上げた。その時、ルーカにはロックアリゲーターの牙が、その一本一本がはつきりと見えた。

「ぐつ、」

ルーカは歯を食いしばり常人の域を遥かに越えたスピードで側面へと飛び、ロックアリゲーターの攻撃をかわした。ロックアリゲーターはそのスピードを殺すことなく聳え立つ断崖へと突撃した。その衝撃で断崖は大きく揺れ、亀裂が走り、上部から崩れはじめた。ロックアリゲーターはなすすべも無く上部から落ちてくる無数の岩の

下敷きとなつた。

「決まつたつ。」

「ま、まだです。」

カイトは直ぐにルーカの発言を否定した。発言通り、ロックアリゲーターは傷一つ負つていらない体を崩れ落ちた無数の岩の中から奮い立たせた。

その後、ルーカ、カイトは幾度と無くその巨体に攻撃を食らわせる。が、鉄のような皮膚に覆われた体に傷を付ける事はできなかつた。

「攻撃が効かない、こんな武器なんか意味がない。もつと大きくて破壊力のある武器があれば、」

「そ、そだあれだつ。少し時間を稼いでください。」

カイトはサンダバイクに向かい走つた。ロックアリゲーターは瞬時に動くものに反応、カイトを追うとした。

「こつちだ、化け物。」

ルーカは近くにあつた拳大の大きさの石をロックアリゲーターに投げつけ、注意を自分自身に引き付けた。

「少し、俺一人でどうしろつて言うんだ。」

ルーカは苦笑を浮かベロックアリゲーターと向き合つた。ロックアリゲーターは鋭い視線をルーカに叩き付けた。

「一人で向き合ふと、死にそうなほど恐い。」

ルーカの額から冷たい汗が流れた。じわり、じわり、とロックアリゲーターはルーカに近づく。ルーカはやけくそになつてガンファーを握り締め、前傾姿勢で攻撃に備えた。ロックアリゲーターとの間合いが詰まつていく。そして、その間合いが2メートルほどになつた時、ロックアリゲーターは再度その口を広げ、大量の唾液を垂らした。

「あ、はは、君、大きい口だね。」

ルーカは言葉の通じない相手に話し掛けた。が、返答など或筈もない。ロックアリゲーターはその体勢のままルーカに襲い掛かつた。

ルーカーはその攻撃を間一髪で交わしロックアリゲーターの側面へと逃げた。が、直ぐにその長く固いしつぽを振り乱し、ルーカの足元を攻撃してきた。ルーカは後方へと飛び、壁を蹴り、ロックアリゲーターの前へと着地、攻撃態勢を取りつつ後ろに下がった。先程までルーカが立っていた場所は、岩が削られ、重機が整地したように奇麗になっていた。

「カイト、まだなのか、こんな攻撃いつまでも交わせない。」

「後少し、待つてください。」

カイトの回答はそれ以上なかつた。こうしている間にも、ロックアリゲーターは次の攻撃のためにルーカに近づく。そして再度攻撃態勢をとつた。

「もう一撃来る。」

ルーカが構えをとるために聞き足をふんばつた。その瞬間、先ほどの一撃で弾き飛ばされた岩の残骸に足を取られ、体勢を崩した。ロックアリゲーターはそれを見逃さなかつた。大きく口を開け、付隨している鋭い牙がルーカに向かつた。

「ルーカ、腕を出して、」

カイトの声でルーカは腕を差し出した。カイトの運転するサンドバイクは頂上から猛スピードでルーカの後方を走り抜けた。

「遅い、カイト。」

カイトの手が、ルーカの腕をしっかりと掴んだ。間一髪でルーカを鋭い牙の攻撃から救つた。さらにカイトはサンドバイクを巧みに操り、10mm機関砲の照準をロックアリゲーターに合わせた。

「いけえーつ。」

ルーカの掛け声と共にアクセル横に附いている機関砲スイッチを押した。

（力チカチカチ）

機関砲からは鉄と鉄が細かく弾けあう音だけが聞こえ、爆音が鳴り響くことはなかつた。

「ロジン、弾を装填していない。」

「そんな馬鹿な。」

カイトはハンドルを一気に回し右旋回、ロックアリゲーターを避けようとした。ロックアリゲーターは大きな口を広げ一人を、待ち受けていた。

「だめです。ルーカ、重心を右に、」

カイトの声でルーカはサンンドバイクの後部座席から体を乗り出し右に重心を置いた。さらにカイトも右一杯に重心を乗せてハンドルを切り続けた。間一髪、ロックアリゲーターの牙を避けたものの次なる障害が待っていた。

「ルーカ、飛び降りてください。」

「どういう意味、」

ルーカは前方を見て驚いた。目の前に2メートルほどの突起した岩があつたのだ。体重移動に気を取られ前方には無関心だったルーカはそのままの体勢でカイトから手を離し、サンンドバイクから転がり降りた。その後にカイトもハンドルから手を離し転がり降りた。無人のサンンドバイクは突起した岩をかすめ横転、勢いをつけたまま今度は岩の壁へと衝突した。そして、空を舞つたサンンドバイクはゆっくりとルーカの側へと落ちてきた。

「わっ、」

ルーカは上空からのプレゼントに驚嘆し、慌てて四つん這いでその場から逃げた。

「これからどうするんだ。カイト、」

ルーカは鼻息を荒くしてカイトに尋ねた。

「どうすることもできない。僕等は無力です。」

カイトは半ば諦め気味でそう答えた。その間にも、ロックアリゲーターは一人に近づく。万事休す。その時、

「みんな逃げてえー。」

ポロンの声に一人は上を見上げ絶句した。なんとポロンは岩山の上から持っていたダイナマイトを放り投げていた。その数は一つや二つじゃない。10個近いダイナマイトが無造作に宙を舞つていた。

「馬鹿つ、」

「な、な、」

二人は慌ててその場を離れ遮蔽物に身を潜めた。カイトは岩陰に、ルーカはサンダーバイクの影に。ロックアリゲーターは事情が飲み込めず、上空から降り注ぐダイナマイトに向かつて吠えた。

（ドガガツガーン。）

地面に落ちたダイナマイトは周囲の岩などを碎き飛ばしその場の風景を見事に変えた。上空からは碎かれた岩が小石となり雨のようにその場に降り注ぎ、辺りは爆風によって吹き上がった砂煙で何も見えなくなつた。

「二人とも無事なら返事して、」

ポロンは岩場から身を乗り出し呼びかけた。しばらくの間返答すら聞こえず静かに時は流れた。

「ふはつ。ペッペッ。たくつ、お前は俺達もいっしょに殺すつもりか。」

「うつぱあつ。少しダイナマイトの使い方が違うつうな気もしますが。はははつ。」

二人は口の中にはいつた砂を吐き出しながら、土砂の下から生還しそう答えた。

すっかり姿を変えてしまつた岩山。その頂上付近で下を見下ろし一人の生還に喜びはしゃぐポロンであつた。岩山は爆発の衝撃でもうくなり今にも崩れそうだつた。そして、ついに重みに耐えられなくなつた岩は亀裂が入りポツキリと割れてしまつた。

「きやああー」

ポロンは落ちる途中、手足をばたばたさせるが空中では無意味。直ぐに態勢を崩し頭から地面に急降下していった。

「ポロン。うつ、足が抜けない。カイト、」

「判っています。任せてください。」

ルーカは土砂にブーツを挟まれ身動きができない。そんなルーカに変わつてカイトは瞬時に行動を開始、即座に地面を蹴り上げ、空中

でポロンを抱きかかえた。

「ほつ、」

ルーカは一息つき、上空から下へと視線を移した。その時、土砂がかすかに揺れ、そして大きく盛り上がった。

「危ないカイト。奴はまだ生きている。」

ルーカは大声で叫んだ。その時、傷を負ったロックアリゲーターが雄叫びとともに姿を現した。しかし、ポロンを抱きかかえているカイトにはどうする事もできない。重力の法則によつて地面に吸い込まれていく。そして、ロックアリゲーターの唾液まみれの牙が鈍く光つた。

「このままだと奴の餌食になつてしまつ。」

ルーカはこの危機を回避するために無い思考能力をフル回転させる。

「これだ、」

ルーカは屍のようになつてゐるサンドバイクに手を伸ばした。

「動けつ。」

ルーカはぼろぼろになつたサンドバイクのアクセルを絞り込み祈つた。

（ブゴオーン。）

その祈りが神に通じたのか。爆音が鳴り響きエンジンに火が灯つた。ルーカはアクセルを絞り込み急発進した。埋もれていた足が抜け、ロックアリゲーターに向かつて突進した。そして、そのままロックアリゲーターの横腹へとサンドバイクが激突、その勢いでロックアリゲーターは横転した。それが幸か不幸か、ロックアリゲーターの倒れざまに固く鱗のようなしつぽがカイトの左足をかすめた。

「ぐつ、」

カイトは苦痛で顔を顰めた。それと同時にカイトは地面に着地、すぐさまルーカの運転するサンドバイクにポロンを抱きかかえたまま飛び乗つた。

ルーカはカイトとポロンをサンドバイクに乗せ岩山から離れた。カイトの左足からは血が流れ落ちていた。

「カイト、足の具合はどうだ。」

「出血は收まりつつあります。ですが戦闘は少し無理みたいです。」

カイトは後部座席で止血を行っていた。サンドバイクはマフラーから尋常で無いほどの煙を出しフル回転で殺風景な砂漠を進む。フル回転といつても駆動系は先程の横転でぼろぼろになつていて、当初のスピードの半分にも満たなかつた。

「ルーカ、凄い排煙ね。それでこれからどうなるの。」

相変わらずポロンの発言は虚を衝いた。ルーカは頭を抱え無言になつた。

(ドバーン)

突然、後方から砂が吹き上がり、ロックアリゲーターのその巨体が砂上に飛び出してきた。そして、体の固い部分だけ砂上に露出させルーカの運転するサンドバイクに接近してきた。アクセルを一杯にまわして追走を追い払おうとするが、その距離は確実に狭まつていった。五メートル、4メートル、3メートル、2メートル、ロックアリゲーターは今にも口を開け、サンドバイクごと丸呑みにしそうな勢いだつた。

「ポロンさん、耳を押さえてください。」

「カイト、焼け石に水だ、やつには効かない。」

「そう、鉄のような鱗に覆われた場所はね。」

カイトはルーカの忠告も聞かず、腰から銃を抜き、体を反転させ、シングルアクションでトリガーを絞り込んだ。

(バゴーン)

ピースメーカーが火を吹いた。弾丸はロックアリゲーター左目に命中。

「そうか、いくら体が鉄のようには硬くても、目はそうは行かない。」

ルーカは肩越しにカイトを、そしてロックアリゲーターを見た。ロックアリゲーターは顔を振り乱しその痛みを表現した。そして、一瞬こちらを睨み付け砂の中にその姿を隠した。

「やつたな。カイト、」

ルークは片方の目を瞑り、親指を立て、カイトに微笑んだ。

「やつはまた来ます。きっと、」

カイトはルークの笑顔には答えなかつた。それからしばらくしてサンドバイクはオイルを飛ばし、ついにオーバーヒートした。

太陽は傾きかけているにもかかわらず、気温は50度を越していた。照り付ける太陽の光が砂に反射し体の力を奪う。倒れた者には死、それは周囲に転がっている無数の白骨化したデザートバッファローが無言のまま忠告していた。ルークはカイトに肩を貸し、砂漠の中、町を目指し歩いた。

「何所かでひとまず休もう。」

ルークは喉を嗄らしながら言つた。

「こままだとロックアリゲーターが追いつく前にこちらがばててしまします。」

カイトも足を引き摺りながら田差しに田を向けた。

「あつたー、」

その時、前方を歩いていたポロンが右前方を指差した。そこには砂漠で唯一の日陰が出来るロックマウンテンがあつた。三人はそこへと足を運び、亀裂の中へ入つて行つた。

少し前まで水気があつたらしく、所々に枯れた木々が地面上に根をのばしていた。ポロンは岩陰を見つけ、残り僅かな固形燃料を使いコーヒーを沸かしはじめる。ルークは抜け殻のように黙り込んだままその場に腰を下ろした。カイトも同じように座り込み、腰から銃を抜いた。

（カチッ）

シリンドーラッチを押し、シリンドー内の残弾を確認した。

「二人ともコーヒーできたわよ。これでも飲んで気分を直して。」

ポロンはそう言うと一人にコーヒーの入つたアルミコップを手渡した。二人は暗い顔のままコップに口をつけ、喉に流し込んだ。

「ブウー、」

二人は同時にコーヒーを吹き出した。

「どうしたの、二人とも、」

「ポロン、コーヒーに何を入れた。」

「何つて、砂糖以外何も、あつ、」

ポロンは砂糖の入った袋を取り出し確認。言葉を止めた。

「ごめん、塩、入れてた。」

「ははははっ、」

ポロンは一人に謝った。ルーカとカイトは顔を見合わせ黙り込んだ。

「ははははっ、」

ルーカとカイトは思いがけない事に大声で笑った。  
「ああ、笑つたら良い手を思い付きました。ルーカ、少し付き合つてください。」

カイトは「コップをその場に置き立ち上がつた。

「ポロンさんはここにいてください。」

「ここにいて大丈夫なの。」

「奴は目を負傷して用心深くなっています。日が沈むまでは行動してこないでしよう。」

カイトはルーカに同意を求めるように視線を送つた。

「俺が奴なら、そうするよ。本能的に、」

ルーカはカイトの話に付け加えた。

日は西に傾き、地平線の彼方に沈もうとしていた。ロックマウント頂上部にポロンを残し、ルーカとカイトは亀裂内部を足早に探索していた。そのうちにカイトは一本の木の前で止まつた。乾燥樹の一種、炎陽木と言う砂漠地帯では貴重な植物。水の少ない場所の植物としては珍しく道管が極端に細く内部は細胞がびっしりと詰まっている。カイトはその木をじつと見詰め、背中にさした木剣を抜き根元に近い場所を一閃。木は切り口から滑るように落ち、固い地面に突き刺さつた。カイトはその木を数本切り落とし、ルーカに手渡した。

カイトはルーカを連れ、亀裂下部へと降り丹念に地形を見入つた。

「ここが良いですね。ルーカ、ロープを持ってきてください。それと、ポロンさんをこの上に移動させてください。」

「わかった。何をするのかはわからないけど、カイトにまかせるよ。」

カイトはルーカに指示を送った。ルーカはその場に先程の木を置き、ポロンの待つ場所へと向かった。

カイトはルーカがポロンの元へと向かって手ごろな若を見つけてきた。そして、慎重に場所を決めながら、先程持ってきた木の中で最も柔軟で折れにくい物を選んだ。さらに先端を鋭く研ぎ、木の杭を作った。

「この辺で良いですね。」

カイトは残りの木で足場を作り、杭を地面に突き刺した。さらに若を、簡易的なハンマーがわりにし杭を深く打ち込んだ。

「おーい、連れてきたぞー。」

ルーカがカイトの頭上で終了を告げるために手を振った。そのころには下準備も終わり笑顔で手を振り替えした。

ルーカはポロンを上に残し下へと降りてきてカイトにロープを渡した。カイトは打ち込んだ杭の上部と下部にロープを結び付け、巨大な弓を作った。その後、突き刺さった木を地面から抜き上げ、カイトは余分な枝を全て切り落つた。そして、簡易的ではあるが長さ2メートル程の巨大な矢を作りあげた。

「少し手伝ってください。」

カイトは矢を弦代わりのロープへ押し当てルーカにそれを引かせた。杭は弧を描き弓矢を形作った。元々柔軟性に富んだこの木。ここまで弧を描いた状態で放たれた矢は絶大な力を生み出すだろう。

「これで良いか。」

ルーカがそう言つと、カイトは残りのロープを使い、その状態で固定した。

一通りの準備を終えたカイトとルーカはその場を離れポロンの待機する崖の上へと移動した。カイトはそこで今回の作戦について語り始めた。

「ここは砂漠から一直線、袋小路になっています。そして、幅はき

わめて細く、ロックアリゲーターの最大の攻撃、すなわちしつぽの攻撃はこの狭さだとまず無理です。」

ルーカは真剣な眼差しで肯く。さらにカイトの話は続いた。

「奴はある種の匂いに反応しここまで入つてくるでしょう。そこであれを奴の口内、つまり鱗に覆われていない場所へ打ち込みます。」

「口内って、どうやって。」

ルーカは首をかしげ尋ねた。

「ロックアリゲーターに慣れらず、肉食アリゲーターの全てが身につけている習性を考えればいいのです。」

カイトはわざとルーカから視線を外し、空を仰いだ。ルーカはしばらく考え一つの結論に辿り着いた。

「まさか。」

「そのまさかです。アリゲーターの習性の一つ、獲物にとどめを刺す時には大きな口を開け獲物を狙う。そこに矢を打ち込む。これ以外ありません。」

カイトはそう言つと崖の下を覗き込んだ。

「それを俺にやれって。」

「はい。」

「俺におとりになれって言うのか。」

「はい。」

カイトは淡々と答えた。

作戦会議も終わりルーカは一人その場を離れ、崖の下を覗き食い入るよう周囲を見入つていた。

「ポロンさん、今うちに包帯を新品と付け替えましょう。」

ポロンはカイトの指示通り今まで使つていた血の着いた包帯を新しいものに付け直した。数分間ルーカはその風景を目に焼き付け二人の元へと戻つてきた。

「これを持っていてください。」

「はいルーカ。」

戻ってきたルーカに一人はその血で汚れた包帯を手渡した。

「これをどうするんだ。」

「こうするのです。」

カイトはそう言つとルーカの体に包帯を禪の様に肩からかけた。

「わーつ、ルーカ似合う、似合つ。」

ポロンの緊張感の無い発言にルーカは恨めしそうな目で答えた。

「ロックアリゲーターは血に敏感になつてゐる。奴は僕らの匂いだけを追いかけて来る。」

「何所までも。」

「ええ、何所までも。僕らを捕らえるまで。奴から逃げることはできません。」

カイトの言葉にポロンは不安を隠せなかつた。

「判つたよ、行くよ。」

不安げなポロンの表情を一瞬見て、ルーカは岩の上から一人、矢面である亀裂の袋小路に降り、腰を下ろした。ポロン、カイトは岩の上でルーカを見守ることにした。

どれくらい経つただろつ。太陽は西に沈み辺りを暗闇が支配し始めた。昼間の暑さがうそのように冷えてきた。ルーカは薪に火を付け寒さを凌いだ。辺りは物音一つしない。ルーカを腹に携帯食料を詰め込み、ロックアリゲーターを待つ。満腹感と程よい温かさがルーカの緊張感を奪い眠気を誘つ。

（グオオーウ）

そんな時、眠気をかき消すほどの鋭い咆哮が亀裂内に響いた。眠気を帯びたルーカの体が瞬時に緊張感を取り戻した。

「来ました。」

カイトは小声でポロンに告げた。ポロンはルーカの無事を祈るように胸の前で手をあわせた。

「き、来やがつた。」

ルーカは暗闇の一点を見詰めた。二つの黄色い光が暗闇の中に浮かび上がり、その光が焚き火の光が届く所まで近寄つて來た。

「ロックアリゲーター。」

ルーカはコックリと側のロープにナイフを近づけた。ロックアリゲーターはまるで品定めでもするかのようにルーカの前で瞳を右へ左へと移動させる。時よりその大きな口を開き、鋭い牙と大量の唾液を露出する。

「やっぱりほつとけない。ルーカがやられちゃう。」

ポロンはそう言つと亀裂に降りて行こうとした。即座にカイトはポロンの腕をつかみ行動を止めた。

「大丈夫、ルーカならきっとやつてくれる。活路を開いてくれる。彼を信じて。」

カイトはポロンの瞳をじつと見つめる。ポロンは降りるのを止め静かにその光景を見守つた。そしてカイトの袖を強く握りしめた。

「カイト、後は頼むぜ。」

そんなロックアリゲーターの態度など気にせず、ルーカは静かに血の付いた包帯で目を覆つた。そして、カイトにその全てを委ねた。「その手がありましたか。」

「ど、どうして、あれじや、何も見えない。」

「恐怖心をなくすためでしょ。五感全てでロックアリゲーターを捕られれば、恐怖で身が竦む。」

「でもそれじやあ何も見えない。」

ポロンの不安は依然として消えない。

「だから僕らが側にいるのです。」

「えつ、どういう事。」

「僕らが彼の目になるのです。絶好のタイミングでその機を知らせるのです。三人でロックアリゲーターに立ち向かっているのですよ。」

「カイトはそんなポロンにそつと言つた。ポロンは一つ起き、カイトに送つていた視線をルーカに向けた。その表情に迷いは感じられない。」

ロックアリゲーターがルーカの前に来てどのくらいたつだろう。しごれを切らせたロックアリゲーターは、今までの行動とは裏腹に

動物としての本能をむき出しにした。前足の鋭い爪で焚き火を払い、周囲に撒き散らした。ルーカは静かに合図を待つた。

「ついに本性をむき出しにしてきました。ピリオドは近い。」

カイトはそう判断しポロンをその場に残したままルーカの背後に飛び降りた。

「カイトか、上で見物決め込めば良いものを。」

ルーカは苦笑いを浮かべ直ぐ後ろにいるカイトに言った。

「ここの方が見やすいのですよ。お気遣い無く。」

「物好きだな。」

二人は眼前に狂暴な獣がいるにも関わらず普段通りの会話を弾ませた。

「さあ、来ますよ、合図は僕に任せください。ルーカ、君はその合図で弓矢を、」

「分かった。」

ルーカはそう言つと、神経を耳だけに集中し合図を待つた。

ロックアリゲーターは傷つき、本来持つ冷静さ、そして、ずる賢さを完全に失い、本能のままに行動する獣となつていた。口からは大量の涎をたらし、その目は血走つてゐる。

（グオオオー）

ロックアリゲーターは荒々しく吠え、ルーカの方へ突進、2メートルほど前でぴたりと止まった。

「来ます。」

カイトの声で、ルーカのナイフを握る手に力が入る。ロックアリゲーターは数秒間二人を見つめ、口を大きく開けた。近距離で口を開けると肉食動物独特の口臭が漂い、ルーカの、カイトの鼻を突いた。

「まだか、カイト。」

「まだです。僕を信じて、」

カイトはそつとルーカの肩に手を置いた。ルーカの体中に強靭な精神力がみなぎつた。ロックアリゲーターはさらに大きく口を開けルーカめがけ襲い掛かつてきた。

「今です。」

「うおおおー」

ルーカはカイトの合図でナイフが動いた。

(ビュン)

矢の先端は至近距離から見事にロックアリゲーターの口内へ突き刺さった。さらにその勢いは衰えず内部から背中の鱗を突き抜け空を切つた。

「ぐあつ、」

1トンもある巨体が宙に浮き、数メートル後方へと吹き飛んだ。ロックアリゲーターは口と背中から大量の血を流しながら地面へと落ちた。

(ドゴオーン)

落雷でも起こったかのように、周囲が震撼した。カイトは直ぐに一本目の矢を弓に掛けようとした。しかし、一発目で弦の変わりのロープは切れ掛かり、一本目を引くのは不可能だつた。

(グオオオオー)

ロックアリゲーターは最後の力を奮い立たせ、震えるからだを両の手足で起こし前進してきた。一歩、また一歩、周囲に転がっていた岩を踏み潰し、傷ついた体を引きずるように進んで来た。潰された時に弾け飛んだ岩の破片がルーカの目隠しにしていた包帯を切り裂いた。

「あ、あ、あ・・・」

ルーカはあまりにも壮絶な光景に言葉にならない声を漏らし動けなくなつた。

「ル、ルーカ、気を確かに持つてください。」

カイトの必死の呼びかけもルーカの耳には届かなかつた。ロックアリゲーターの口内と背中からは大量の血液が吹き出し、地面を濡らした。カイトは腰から銃を抜き、進行を止めようと連射した。固い鱗にはばまれまるで効かない。ロックアリゲーターは後ろ足で地面を蹴り、ルーカ目掛け飛び掛かってきた。

「ルー・カ、」

「はっ、」

ポロンの叫びが放心状態のルー・カを目覚めさせた。ルー・カは瞬時に近くに置いていた矢を握り、飛び掛かるロックアリゲーターの口に突き刺した

「ぐあつ、」

1トン以上の衝撃が矢を伝いルー・カの手に、体全体に伝わった。ルー・カはロックアリゲーターと共に壁へと吹き飛んだ。

（ガツツ）

断崖に矢の後部が打ち込まれた。断崖を宛がい、矢は奥へと突き刺さり、ルー・カを剥き出しの牙が襲つた。

「危ない、」

咄嗟にカイトはルー・カの体に飛びつき、矢から強引にルー・カの体を離した。矢はロックアリゲーターの体重を支えきれずに折れてしまつた。巨体は地面へと落ち、大きな陥没を残した。ロックアリゲーターは動く気配すらない。ようやく三人に安息の時間が戻ってきた。

「やりましたね。ルー・カ、」

カイトは笑顔でそう言うと、ルー・カの肩を軽く叩いた。ルー・カ体から力がいっきに抜け、その場にしゃがみこんだ。

「ルー・カ、怪我もしたの。」

ポロンとカイトは膝を突きルー・カを気遣つた。

「大丈夫、力が抜けただけ、大丈夫。」

ルー・カは最後の力を出すように筋肉だけで心細い笑顔を作り二人に笑いかけた。

一変として静かな夜となつた。三人はロックアリゲーターから少し離れた岩壁に凭れ掛かり、亀裂の間を埋める星空を眺めていた。血の匂いが周囲に漂い、冷たい風が時より、その匂いを吹き飛ばしていた。ルー・カはようやく緊張から開放され、ポロンの肩に顔を傾け寝息を立てていた。

「終わったんだよね。」

「はい、」

ポロンが呟く言葉に、カイトはやせしい返事を返した。安心したポロンはルーカの方に体を傾け、瞳を閉じた。

翌朝、カイトは非常用の発煙筒をつけ助けが来るのを待った。数時間後、キヤスによつて招集されたライク、その他のF・ハンターがその煙を見つけ、その場に駆けつけた。

#### 報告書

カスターⅡから南東に520km

ゴヘイズ砂漠・ロックマウンテン亀裂部においてロックアリゲータ

ー死亡

死亡による腐食が激しく運搬不可能

確認により任務遂行

確認者

代表 F・ハンター (A級) G・ライク

依頼受任者

代表 F・ハンター (C級) ルーカ

報告終了

ルーカは病院のベッドで目を覚ました。さわやかな風が白いカーテンを揺らしていた。

「目覚めましたね。気分はどうですか?」

カイトの声が隣から聞こえてきた。ルーカは少し考え、今までのことを思い出していた。

「ああ、いいね。生きてるって、実感できる。喜びや、悲しみ、安心に恐怖、全てを体に感じることができた。」

ルーカは天井を見つめたまま笑みを浮かべそう答えた。体を起こすことが少し困難であったが、時間をかけてゆっくりと起き上がった。カイトは窓に凭れ風を浴びていた。すぐに扉が開き、ポロンが花瓶に花を詰め込んで部屋へと入ってきた。

「はっ、おはよう。」

ポロンは首を少し傾け、笑みを浮かべた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0977d/>

---

珍獸記

2010年10月10日20時49分発行